

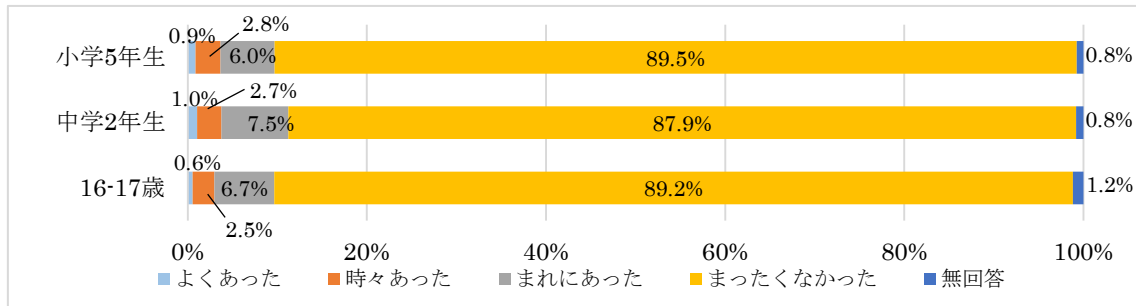
第2部 生活困窮の状況

1 家計の状況

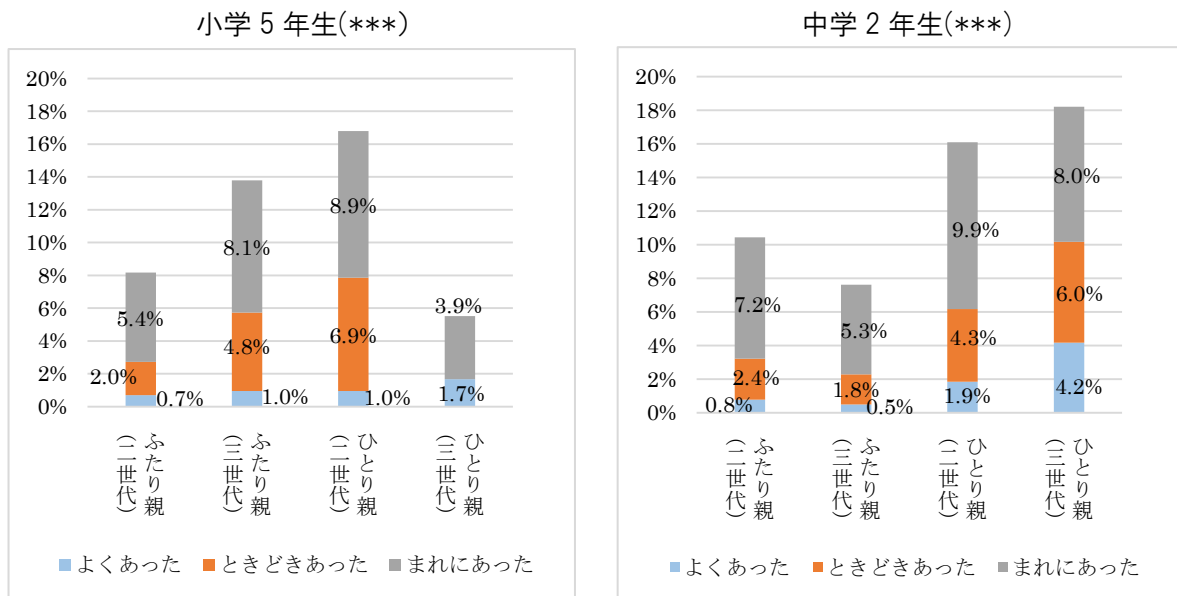
(1) 食料を買えなかった経験

子供の保護者に「過去1年の間に、お金が足りなくて、家族が必要とする食料を買えないことがありましたか」と聞いた。どの年齢層においても、約9割の保護者は、家族が必要とする食料が買えなかったことはないと答えている。しかし、約1割の保護者は食料が買えなかった経験が「よくあった」、「時々あった」、「まれにあった」と答えている。どの年齢層でも、「よくあった」と答えた保護者は1%以下、「ときどきあった」と答えた保護者は3%以下である。年齢層間の有意差は見られない。

図表 2-1-1 食料の困窮の経験:年齢層別(X)

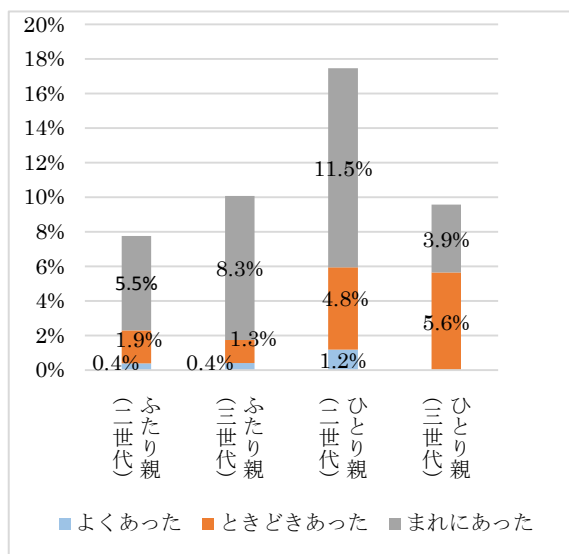


図表 2-1-2 食料の困窮の経験:世帯タイプ別¹



¹ 世帯タイプ別のサンプル数は以下のとおり。以降、すべての世帯タイプ別図表は同じ。
 (小学5年生) ふたり親 (二世帯) 2,157 ふたり親 (三世帯) 234 ひとり親 (二世帯) 311 ひとり親 (三世帯) 56
 (中学2年生) ふたり親 (二世帯) 2,109 ふたり親 (三世帯) 229 ひとり親 (二世帯) 336 ひとり親 (三世帯) 72
 (16-17歳) ふたり親 (二世帯) 1,785 ふたり親 (三世帯) 221 ひとり親 (二世帯) 358 ひとり親 (三世帯) 75

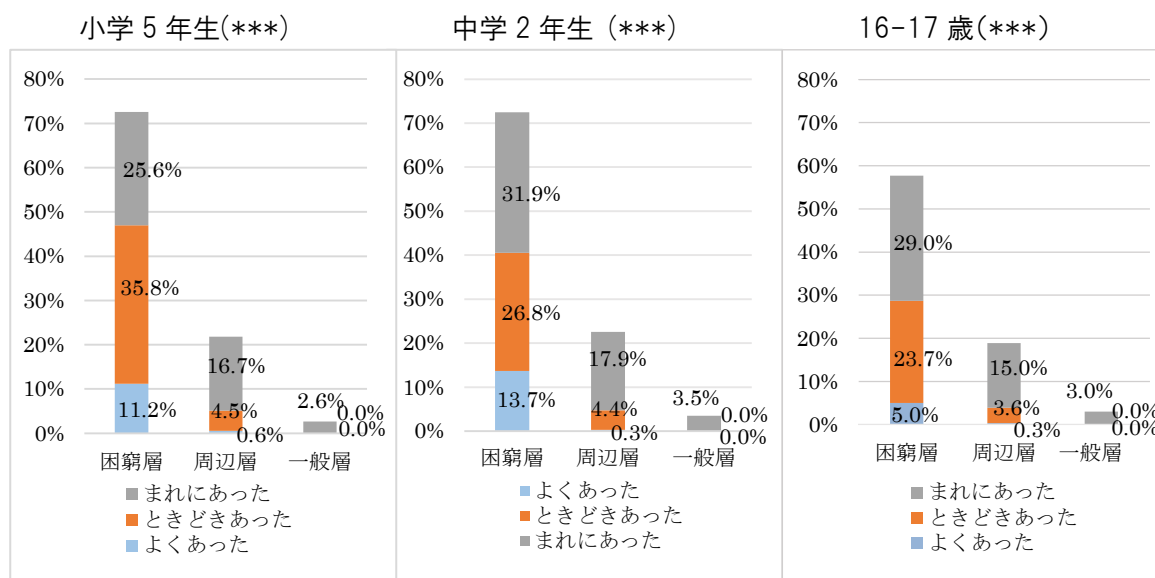
16-17 歳(***)



世帯タイプ別に見ると、どの年齢層であっても「ひとり親（二世代）世帯」の食料の困窮の度合いが高く、「よくあった」、「ときどきあった」、「まれにあった」を合わせると約1割～2割となっている。「ひとり親（三世代）世帯」については、年齢ごとの差が大きいですが、これはこの世帯タイプのサンプル数が少ないことにも関係していると考えられる。

生活困難度別には、生活困難度の識別自体に本設問の項目も入っていることもあり、強い相関がみられる。困窮層においては、「よくあった」、「ときどきあった」、「まれにあった」を合わせると小中学生では7割以上、16-17歳でも6割に近い世帯において食料の困窮経験がある。「よくあった」とする世帯に限っても小学5年生で11.2%、中学2年生で13.7%、16-17歳で5.0%と高い割合となっており、困窮層では食料が十分に確保できていない。「よくあった」、「ときどきあった」とする世帯は、一般層ではどの年齢層でも0%である。

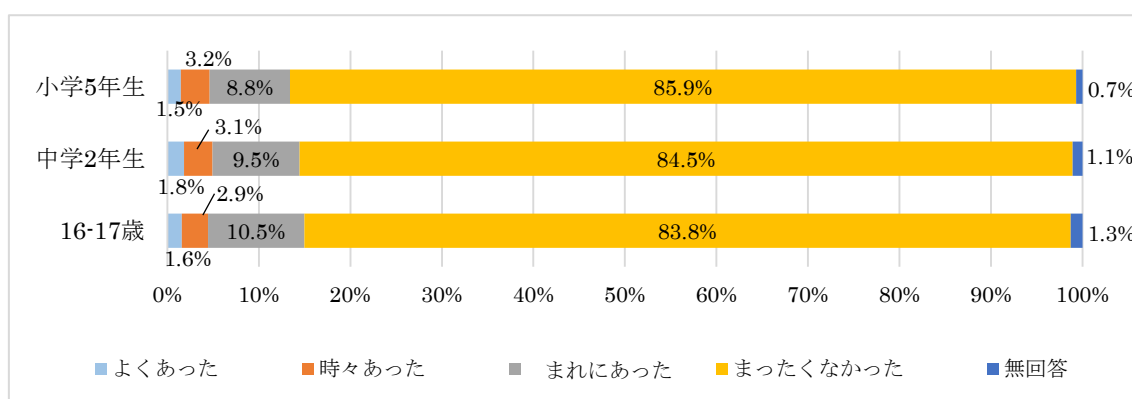
図表 2-1-3 食料の困窮の経験:生活困難度別²



(2) 衣類を買えなかった経験

子供の保護者に「過去 1 年の間に、お金が足りなくて、家族が必要とする衣類を買えないことがありましたか」と聞いた。どの年齢層においても、約 8 割の保護者は、家族が必要とする衣類が買えなかったことは「まったくなかった」と答えている。しかし、約 15%の保護者が衣類を買えなかった経験が「よくあった」、「時々あった」、「まれにあった」と答えている。「ときどきあった」、「よくあった」と答えた保護者はどの年齢層でも約 5%であり、年齢層間の有意差は見られない。

図表 2-1-4 衣類の困窮の経験(X)

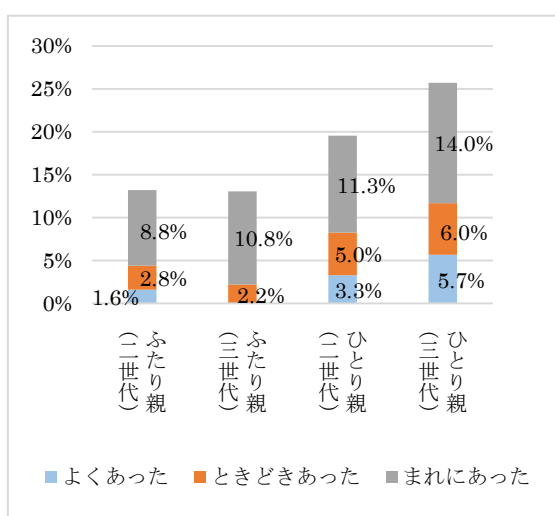


² 生活困難度別のサンプル数は以下のとおり。以降、すべての生活困難度別図表は同じ。
 (小学 5 年生) 困窮層 125 周辺 327 一般層 1,757 (中学 2 年生) 困窮層 159 周辺 329 一般層 1,768
 (16-17 歳) 困窮層 136 周辺 336 一般層 1,506

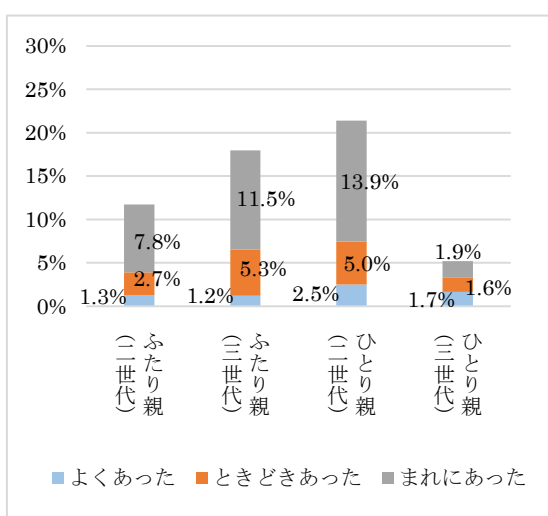
世帯タイプ別に見ると、ひとり親（二世帯）世帯における衣類の困窮の割合は、「よくあった」、「ときどきあった」、「まれにあった」を合わせると約20%となっており、この世帯タイプの約5人に1人の子供が衣類の困窮を経験している。ひとり親（三世帯）世帯については、小学5年生の衣類の困窮の割合が高く、中学2年生と16-17歳では低い。これは各世帯タイプのサンプル数が少ないことにも関係していると考えられる。小学5年生と16-17歳では、ふたり親世帯であっても、三世帯の世帯は二世帯の世帯よりも高い困窮の傾向が見られる。

図表 2-1-5 衣類の困窮の経験：世帯タイプ別

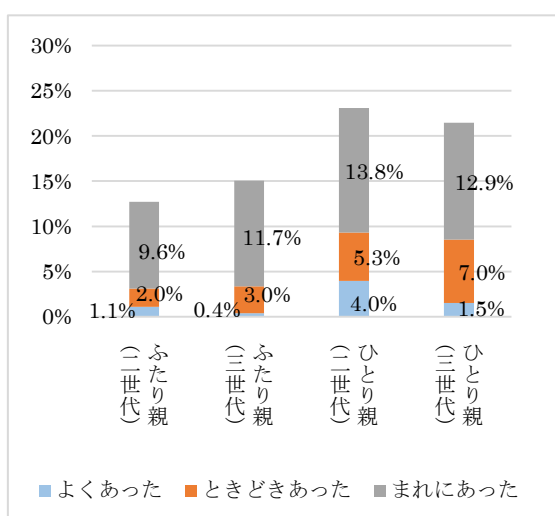
小学5年生(***)



中学2年生(***)

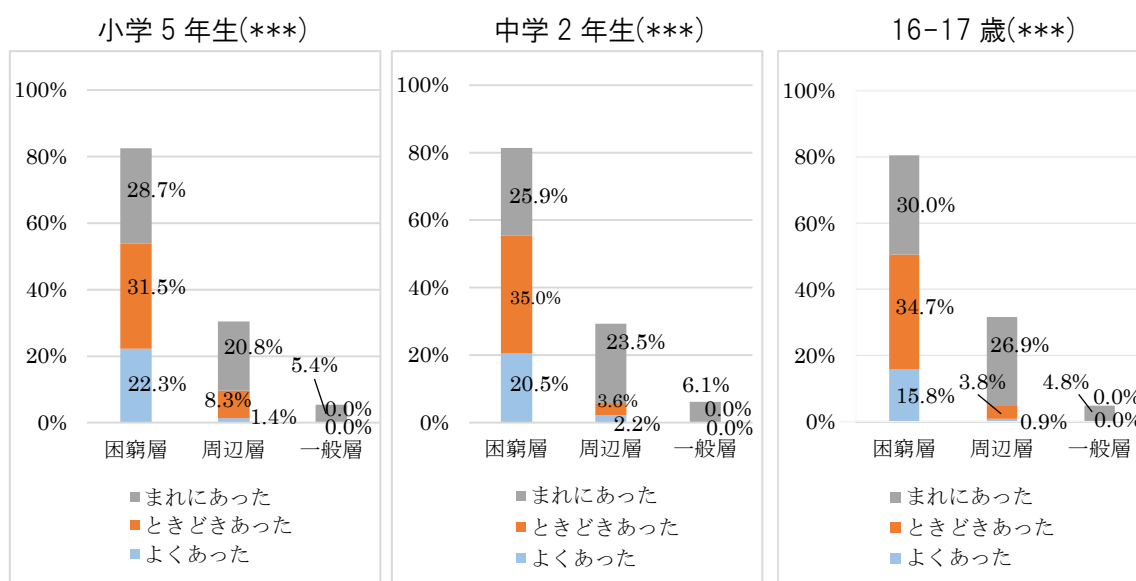


16-17歳(***)



生活困難度別には、生活困難度の識別自体に本設問の項目が入っていることもあり、強い相関がみられる。困窮層においては、「よくあった」、「ときどきあった」、「まれにあった」を合わせると、どの年齢層であっても80%以上の世帯において衣類の困窮経験がある。「よくあった」とする子供に限ると、小学5年生で22.3%、中学2年生で20.5%、16-17歳で15.8%と高い割合となっており、困窮層では衣類が十分に確保できていない傾向にある。「よくあった」、「ときどきあった」とする世帯は、一般層ではどの年齢層でも0%である。

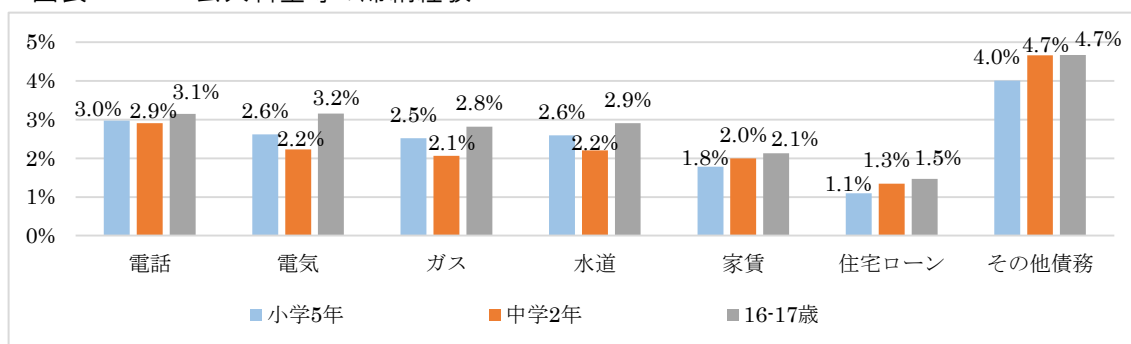
図表 2-1-6 衣類の困窮の経験：生活困難度別



(3) 公共料金等の滞納経験

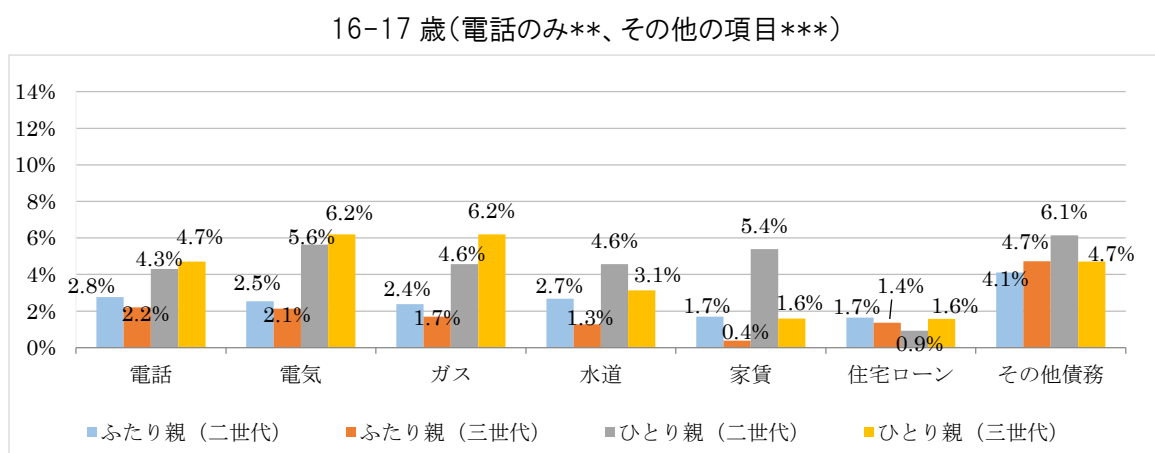
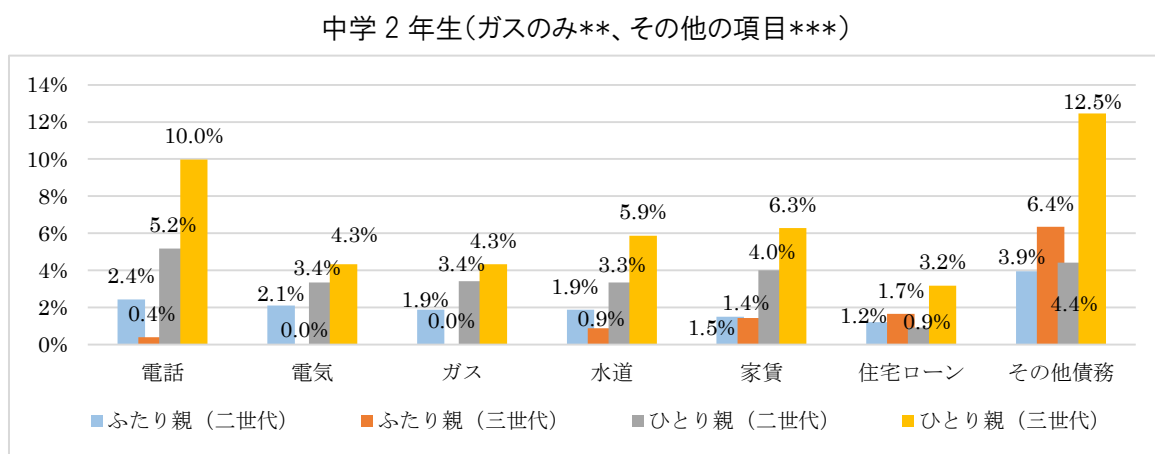
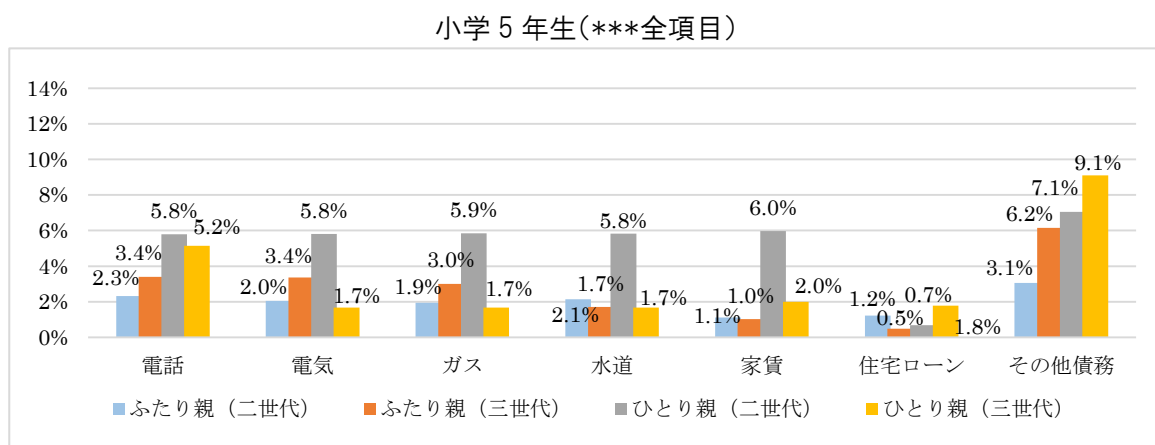
次に、過去1年間において、経済的な理由で、公共料金（電話、電気、ガス、水道）、「家賃」、「住宅ローン」及び「その他の債務」について、支払えないことがあったかを聞いた。4つの公共料金については、どの年齢層においても、約3%の世帯において滞納経験がある。「家賃」は約2%、「住宅ローン」は約1%、「その他の債務」は約4~5%の世帯に滞納経験がある（無回答を除く割合）。

図表 2-1-7 公共料金等の滞納経験



世帯タイプ別に見ると、ひとり親（二世帯）世帯の公共料金（電話、電気、ガス、水道）の滞納が小学5年生では約6%であり、ふたり親（二世帯）世帯の2倍以上となっている。中学2年生と16-17歳では、ひとり親（三世帯）世帯の公共料金の滞納経験が多い傾向にある。ふたり親（二世帯）世帯においても、約2%の世帯において公共料金の滞納経験がある。

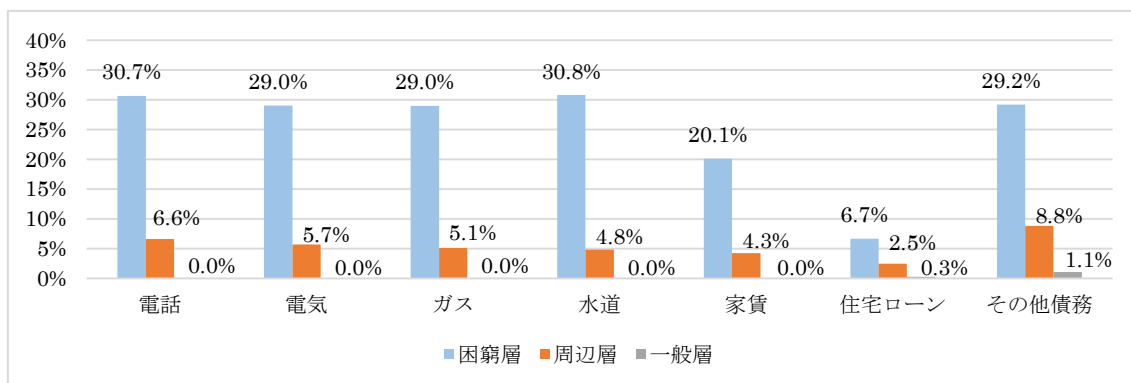
図表 2-1-8 公共料金等の滞納経験：世帯タイプ別



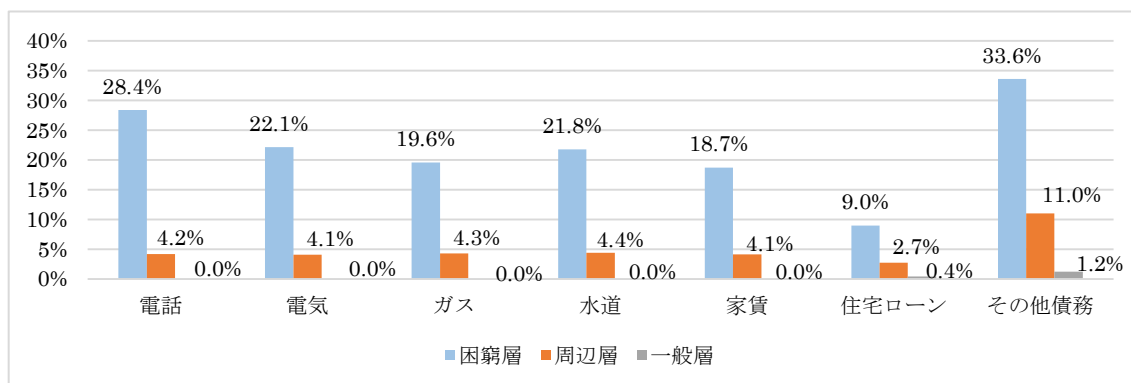
生活困難度別においては、生活困難度の識別自体に本設問の項目が入っていることもあり、強い相関がみられる。どの年齢層においても、困窮層では、約2割から約3割の世帯において公共料金（電話、電気、ガス、水道）の滞納経験がある。一般層においては、公共料金の滞納経験は全て0%である。

図表 2-1-9 公共料金等の滞納経験：生活困難度別

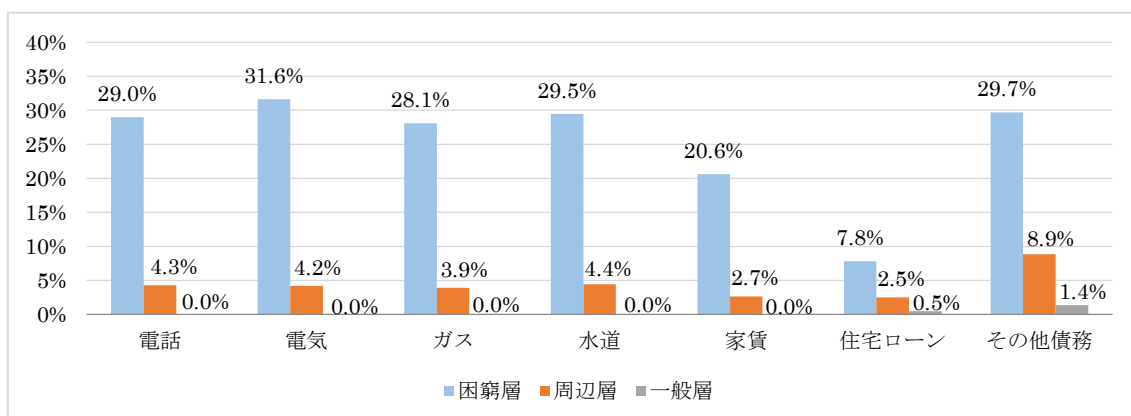
小学5年生(***全項目)



中学2年生(***全項目)



16-17歳(***全項目)



(4) 物品の所有状況

家庭において広く普及している耐久財などについて、それらの有無を保護者に聞いた。その結果、洗濯機、炊飯器、掃除機、暖房機器、冷房機器、電子レンジ、電話（固定電話・携帯電話を含む）、世帯専用の風呂については、欠如している世帯に属する子供の割合は1%以下であった。しかし、「世帯人数分のベッドまたは布団」については約2~3%、「インターネットにつながるパソコン」については約4%、「新聞の定期購読（ネット含む）」については約13~17%、「急な出費のための貯金（5万円以上）」については約9~10%の世帯で欠如している。

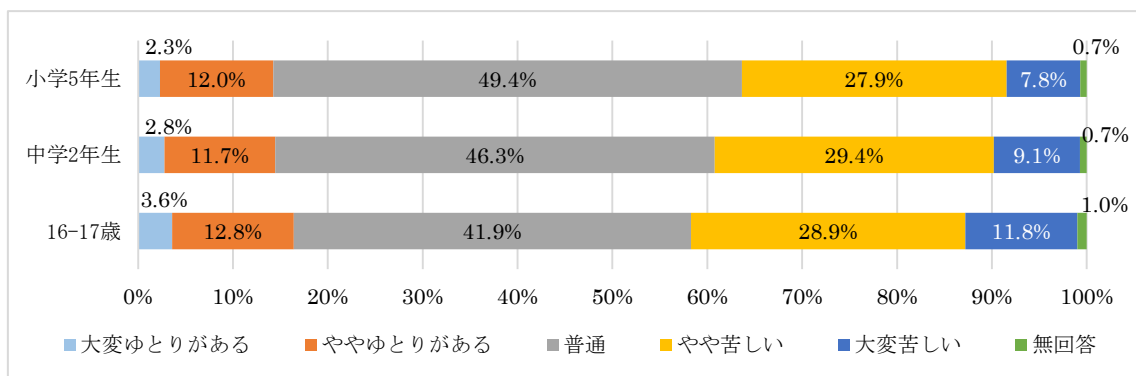
図表 2-1-10 家庭における物品が欠如している割合

	小学5年生	中学2年生	16-17歳
洗濯機	0.2%	0.1%	0.0%
炊飯器	0.2%	0.3%	0.3%
掃除機	0.2%	0.1%	0.4%
暖房機器	0.2%	0.4%	0.4%
冷房機器	0.5%	0.7%	0.8%
電子レンジ	0.2%	0.2%	0.4%
電話（固定電話・携帯電話を含む）	0.6%	0.7%	0.6%
インターネットにつながるパソコン	4.2%	4.2%	3.8%
新聞の定期購読（ネット含む）	16.7%	14.1%	13.2%
世帯専用のお風呂	0.4%	0.1%	0.2%
世帯人数分のベッドまたは布団	3.0%	2.1%	1.8%
急な出費のための貯金（5万円以上）	9.8%	9.0%	10.4%

(5) 暮らし向き

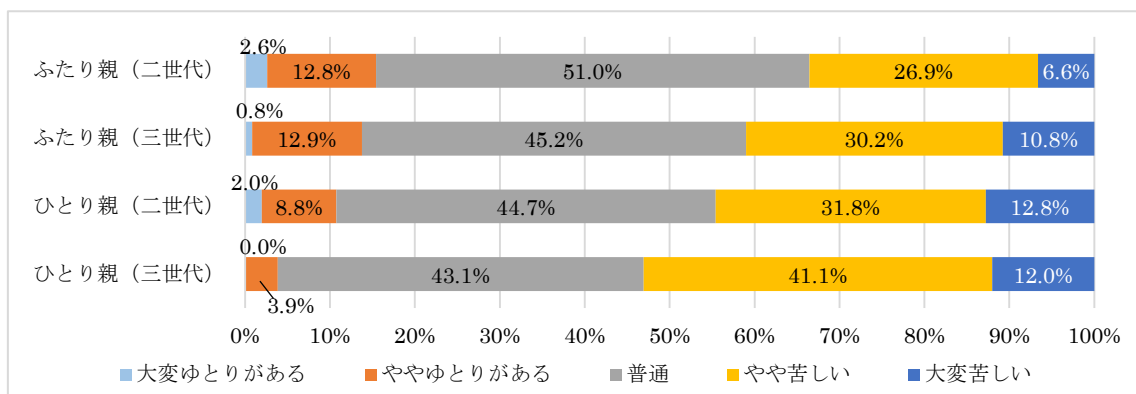
保護者に、「現在の暮らしの状況をどのように感じていますか」と聞いたところ、小学5年生では14.3%、中学2年生では14.5%、16-17歳では16.4%の保護者が「大変ゆとりがある」、「ややゆとりがある」と答えている。一方で、小学5年生では35.7%、中学2年生では38.5%、16-17歳では40.7%の保護者が「やや苦しい」、「大変苦しい」と答えており、苦しいと感じる保護者の割合が、ゆとりがあると感じる保護者の2倍以上となっている。子供の年齢が高くなるほど、「ゆとりがある」と「苦しい」と答える両端の保護者が増える傾向がある。

図表 2-1-11 主観的暮らし向き(***)(年齢層別)



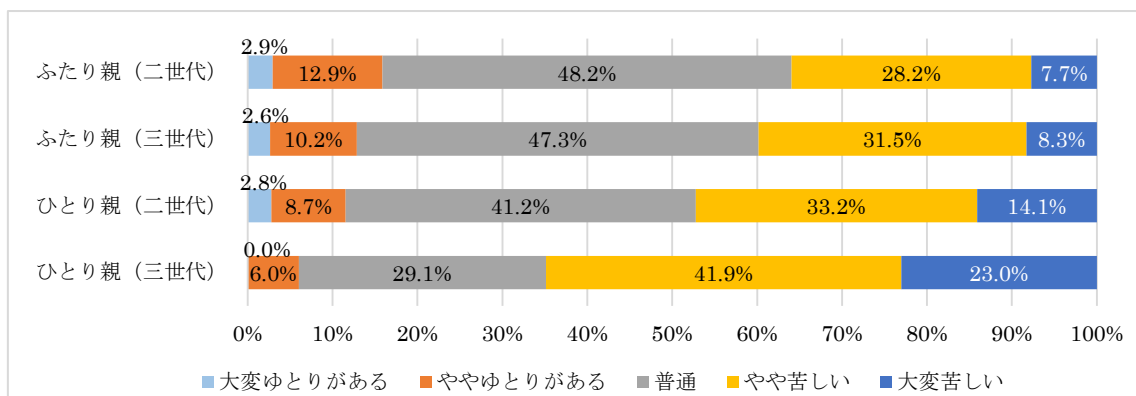
世帯タイプ別に見ると、「やや苦しい」、「大変苦しい」と回答した保護者の割合は、ふたり親世帯よりひとり親世帯の方が高い。しかし、ふたり親（二世帯）世帯においては小学5年生では6.6%、中学2年生では7.7%、16-17歳では9.6%が「大変苦しい」と答えており、どの世帯タイプにおいても主観的暮らし向きが厳しい世帯が存在する。

図表 2-1-12 主観的暮らし向き:世帯タイプ別
小学5年生(***)



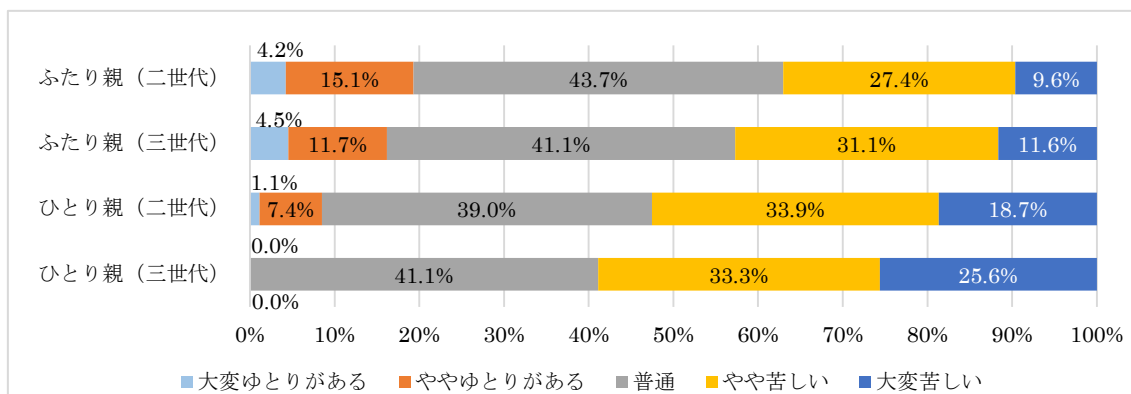
※無回答を除く。

中学2年生(***)



※無回答を除く。

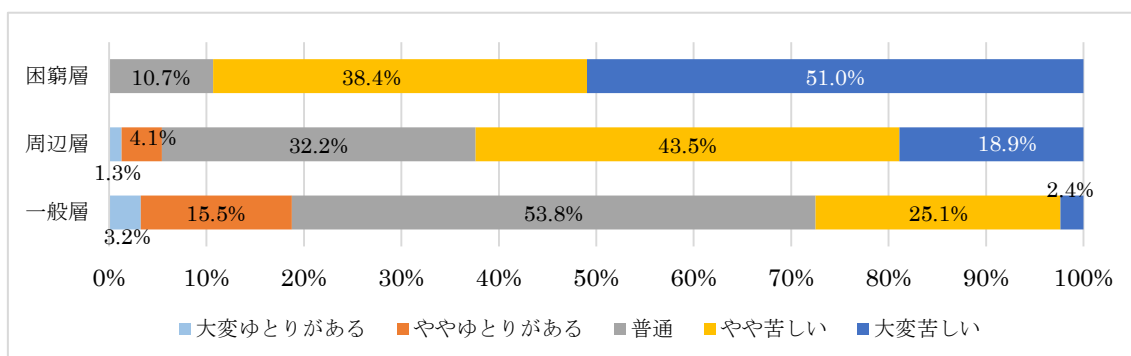
16-17 歳(***)



※無回答を除く。

小学5年生の生活困難度別に見ると、困窮層の51.0%が「大変苦しい」と回答しており、「やや苦しい」を合わせると89.4%が「苦しい」としている。逆に、一般層においては「大変苦しい」と回答する保護者は2.4%に過ぎない（無回答を除く）。この傾向は中学2年生、16-17歳においても確認された。

図表 2-1-13 主観的暮らし向き(小学5年生):生活困難度別(***)

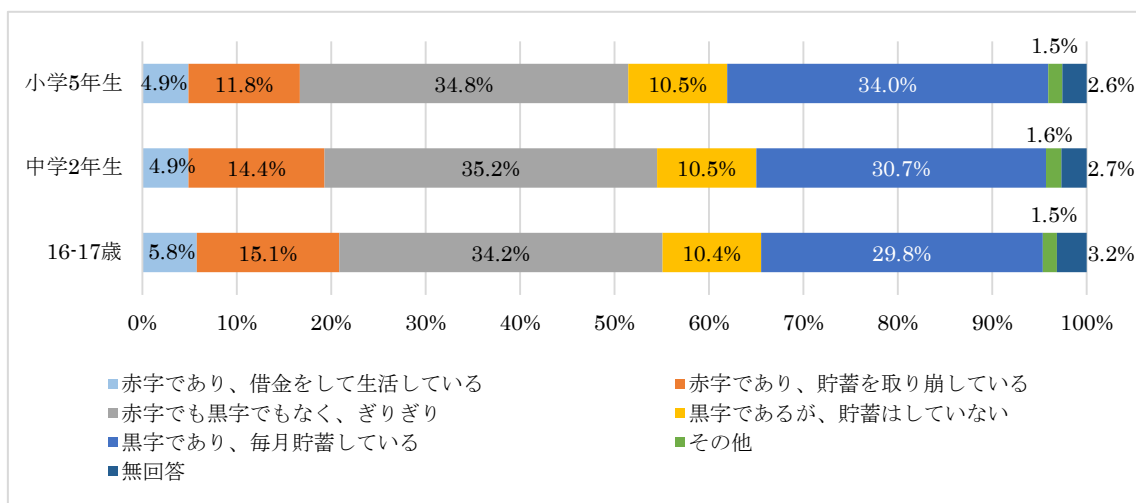


※無回答を除く。

(6) 家計の収支状況

世帯における家計の状況について、保護者に聞いた。どの年齢層も、約5~6%の保護者が「赤字であり、借金をして生活している」と回答している。また、「赤字であり、貯蓄を取り崩している」と回答した保護者はどの年齢層も1割を超えており、小学5年生では11.8%、中学2年生では14.4%、16-17歳では15.1%となっている。「黒字であり、毎月貯蓄している」とした保護者は、小学5年生で34.0%、中学2年生で30.7%、16-17歳では29.8%である。年齢の高い子供の保護者の方が家計の収支が赤字である傾向がある。

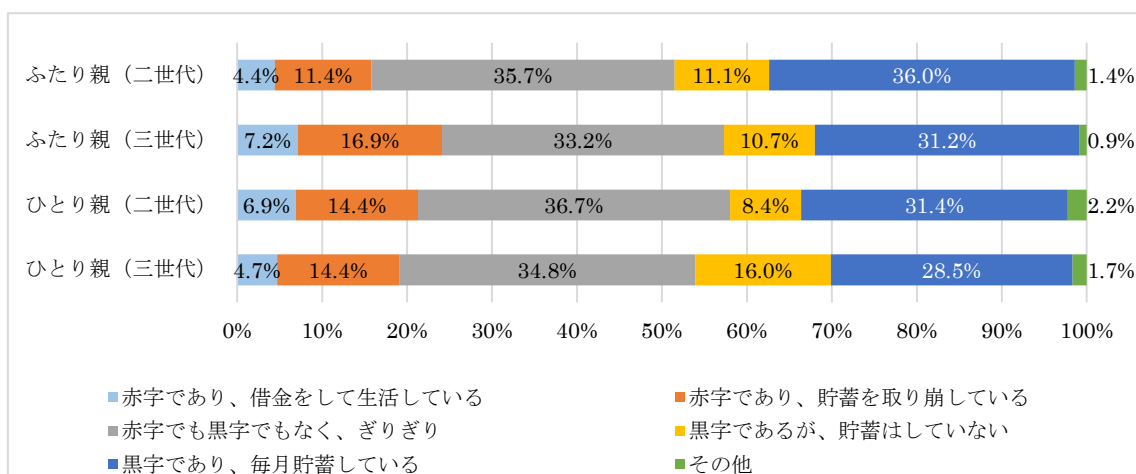
図表 2-1-14 家計の収支の状況(**):年齢層別



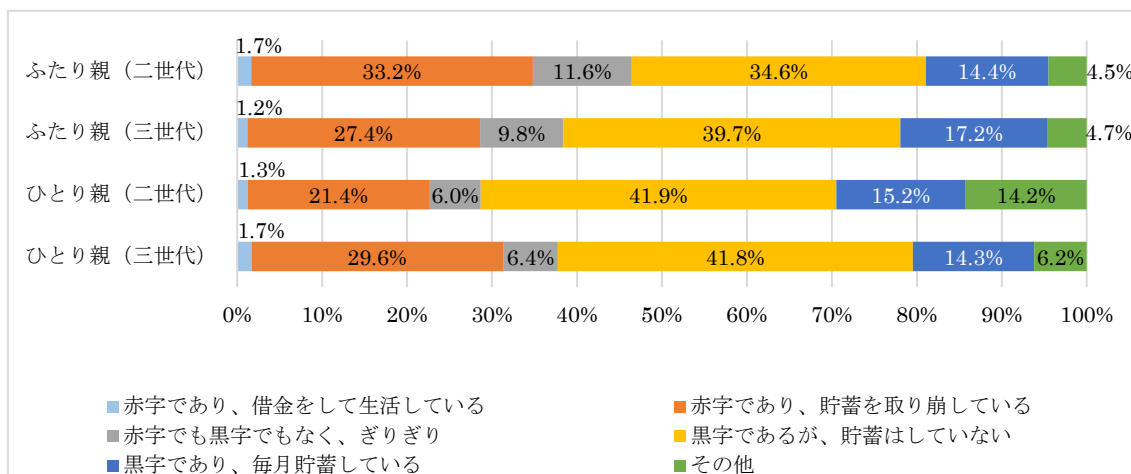
世帯タイプ別では、小学5年生においては、家計の収支には統計的に有意な差が見られないのに対し、中学2年生、16-17歳では統計的に有意な差がある。中学2年生の保護者では、ふたり親（二世帯）世帯とひとり親（三世帯）世帯に、16-17歳の保護者では、ひとり親（三世帯）世帯において、借金や貯蓄の取り崩しをしている割合が高くなっている。

図表 2-1-15 家計の収支の状況:世帯タイプ別(***)

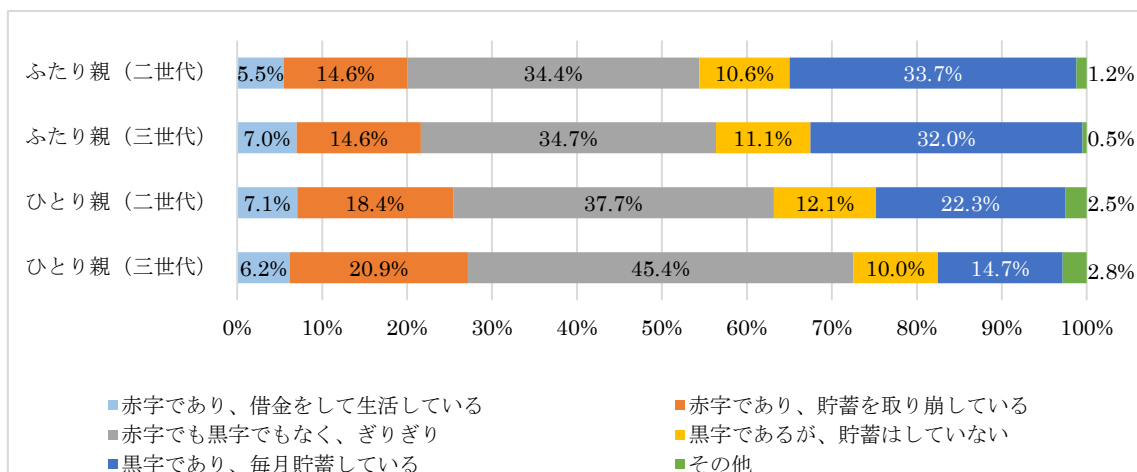
小学5年生(X)



中学2年生(***)



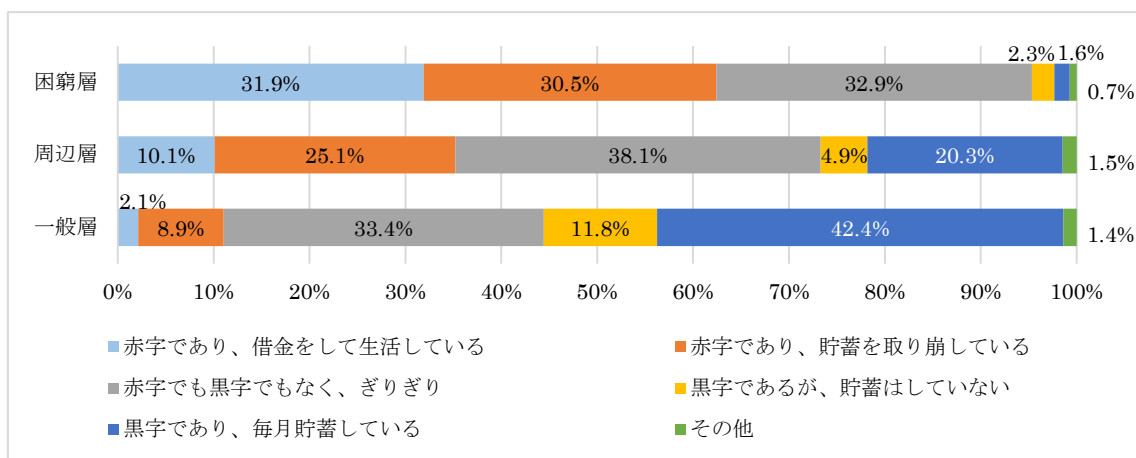
16-17歳(***)



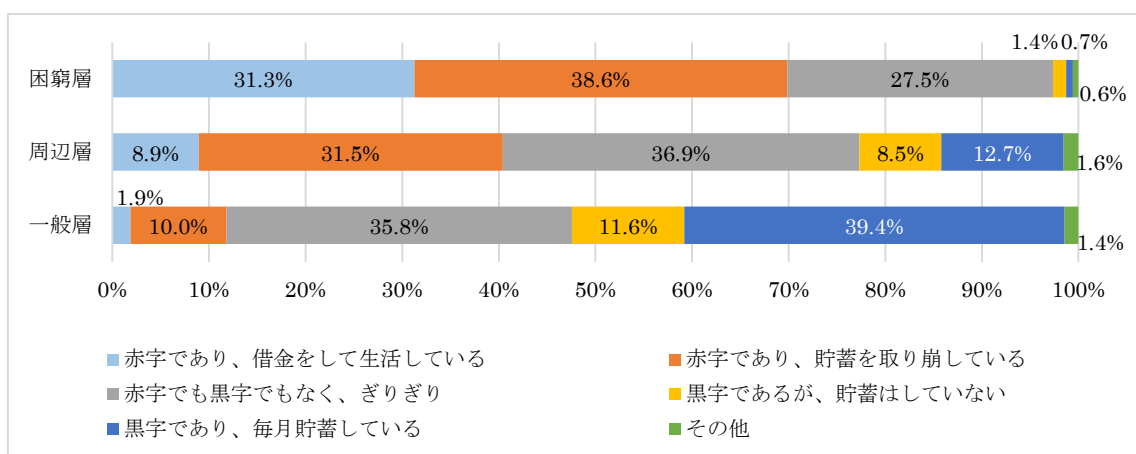
世帯における家計の状況を生活困難度別に見ると、一般層では黒字である割合が5割を超えているのに対し、困窮層では赤字の世帯が6割を超えており、家計の収支の状況が大きく異なることがわかる。借金をして生活している割合も、小学5年生では、一般層が2.1%であるのに比べ、困窮層では31.9%となっている。周辺層でも35.2%で借金、もしくは貯金の取り崩しをしている。この傾向は中学2年生、16-17歳においても同様である。

図表 2-1-16 家計の収支の状況：生活困難度別

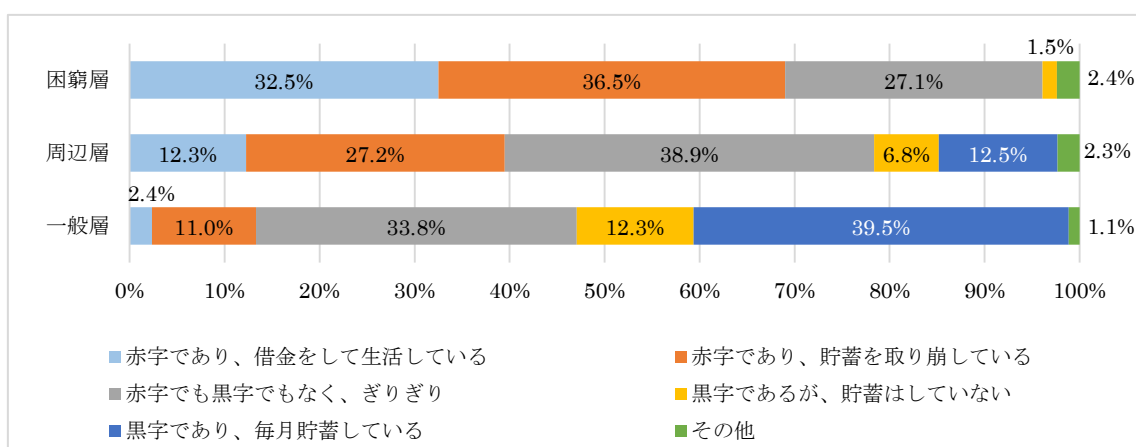
小学 5 年生(***)



中学 2 年生(***)



16-17 歳(***)



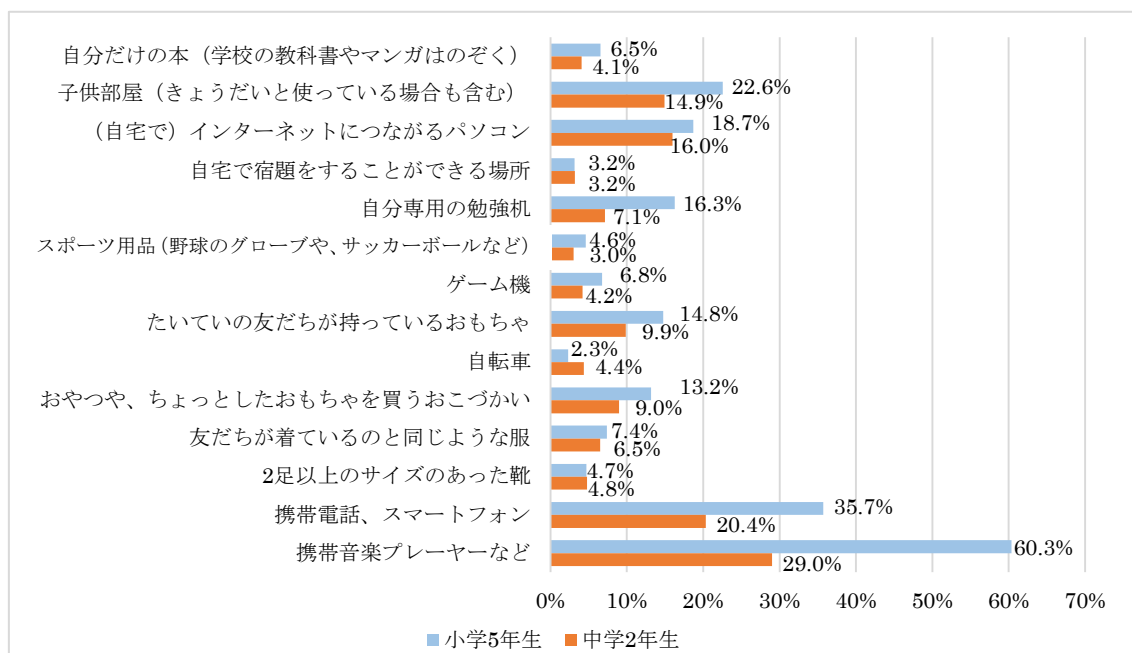
2 子供の生活水準（所有物と体験）

（1）子供の所有物の欠如

子供本人に、現在の日本において多くの子供が所有している物品等について、「ある」「ない（欲しい）」、「ない（欲しくない）」の選択肢で所有状況を聞いた。回答から、それぞれの項目の「欲しいが、持っていない」割合（＝（「ない（欲しい）」と回答した人数／（（「ある」と回答した人数及び「ない（欲しい）」と回答した人数））を計算した。

小学5年生と中学2年生では、「携帯音楽プレーヤーなど」（小学5年生 60.3%、中学2年生 29.0%）、「携帯電話、スマートフォン」（小学5年生 35.7%、中学2年生 20.4%）、「子供部屋」（小学5年生 22.6%、中学2年生 14.9%）について「欲しいが、持っていない」の割合が高かった。また、「インターネットにつながるパソコン」（小学5年生 18.7%、中学2年生 16.0%）、「自分専用の勉強机」（小学5年生 16.3%、中学2年生 7.1%）、「自分だけの本」（小学5年生 6.5%、中学2年生 4.1%）、「自宅で宿題をすることができる場所」（小学5年生 3.2%、中学2年生 3.2%）といった勉強に必要な物品等も「欲しいが、持っていない」という子供がいた。「おやつや、ちょっとしたおもちゃを買うおこづかい」（小学5年生 13.2%、中学2年生 9.0%）、「スポーツ用品」（小学5年生 4.6%、中学2年生 3.0%）、「友達が着ているのと同じような服」（小学5年生 7.4%、中学2年生 6.5%）など、交友関係や子供社会において重要な物品が持てない子供も存在する。

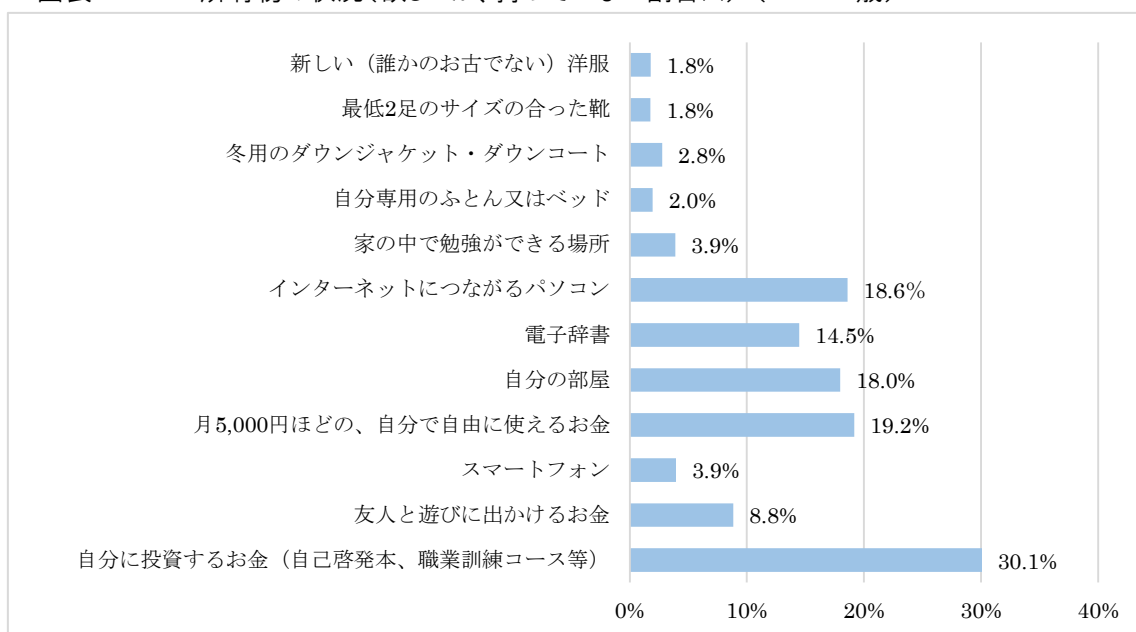
図表 2-2-1 所有物の状況(欲しいが、持っていない割合※):(小学5年生・中学2年生)



※ 「ない（欲しくない）」、「無回答」を分母から除いた割合

16-17歳においては、「自分に投資するお金（自己啓発本、職業訓練コースなど）」が「欲しいが、持っていない」とする割合がいちばん高く（30.1%）、「月5,000円ほどの、自分で自由に使えるお金」（19.2%）、「インターネットにつながるパソコン」（18.6%）、「自分の部屋」（18.0%）についても約5人に1人の16-17歳が「欲しいが、持っていない」状況にある。また、「新しい（誰かのお古でない）洋服」（1.8%）、「冬用のダウンジャケット・ダウンコート」（2.8%）など少数ではあるが持てない子供がいる。

図表 2-2-2 所有物の状況(欲しいが、持っていない割合※):(16-17歳)



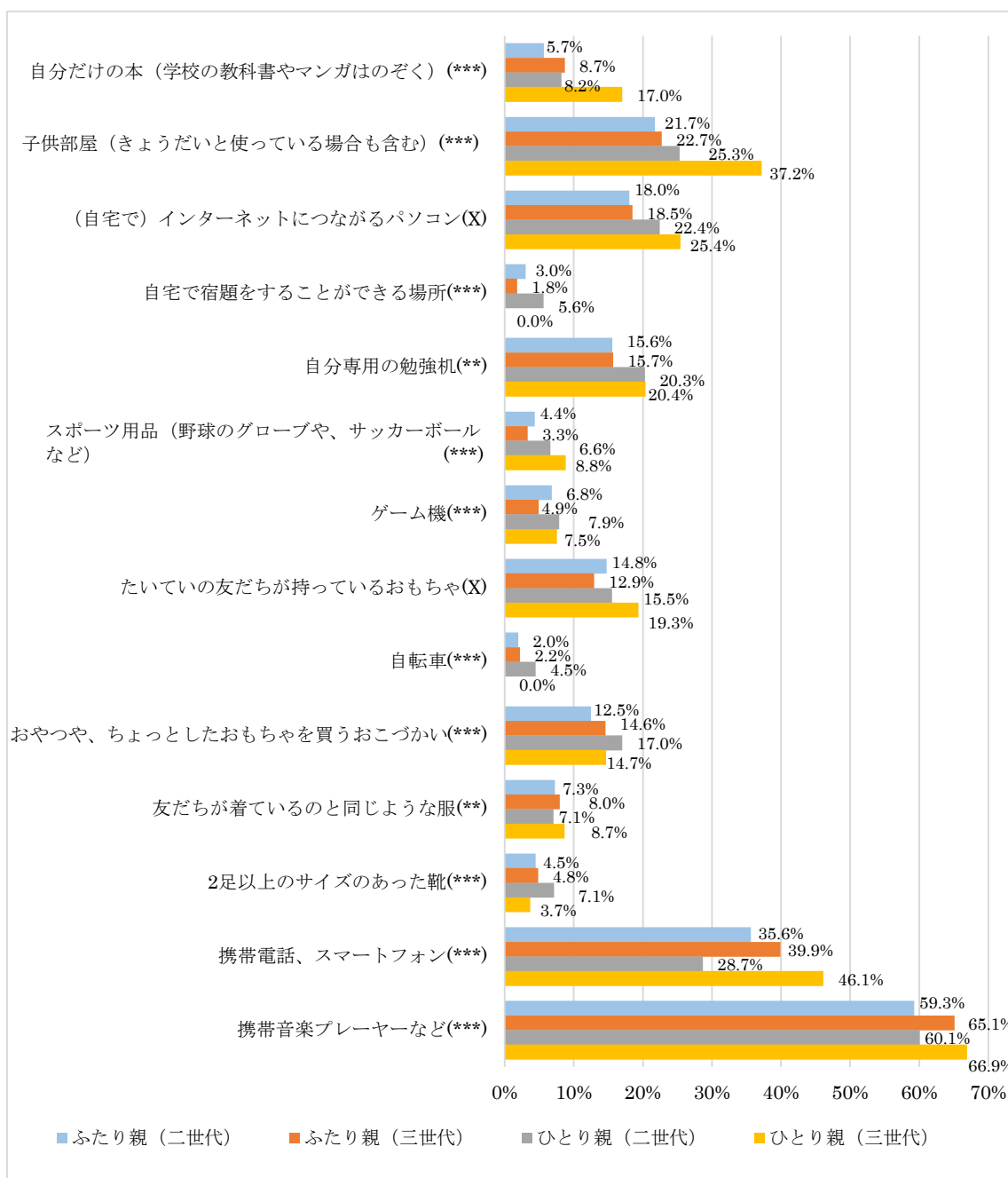
※「ない（欲しくない）」、「無回答」を分母から除いた割合

物品の「欲しいが、持っていない」割合を、世帯タイプ別に見ると、小学5年生においては「(自宅で)インターネットにつながるパソコン」、「たいていの友だちが持っているおもちゃ」以外では統計的に有意な差があった。ひとり親（二世帯、三世帯）世帯の子供において「欲しいが、持っていない」割合が高い傾向にある。中学2年生においては、「子供部屋」、「自宅で宿題をすることをできる場所」、「自分専用の勉強机」、「スポーツ用品」、「ゲーム機」、「友達が着ているのと同じような服」にて統計的に有意な差があり、ここでもひとり親（二世帯、三世帯）世帯の割合が高い傾向にある。

また、16-17歳においては、「新しい（誰かのお古でない）洋服」、「最低2足のサイズの合った靴」、「冬用のダウンジャケット・ダウンコート」、「インターネットにつながるパソコン」、「月5,000円ほどの、自分で自由に使えるお金」、「スマートフォン」、「自分に投資するお金」においては、世帯タイプ別の差が見られなかった。しかし、「自分の部屋」や「家の中で勉強ができる場所」などには統計的に有意な差が見られた。これは、この年齢層においては、アルバイトなど自分である程度の収入を得ることができるため、住宅など自分で購入することができないもの以外については格差が縮小していくからと考えられる。

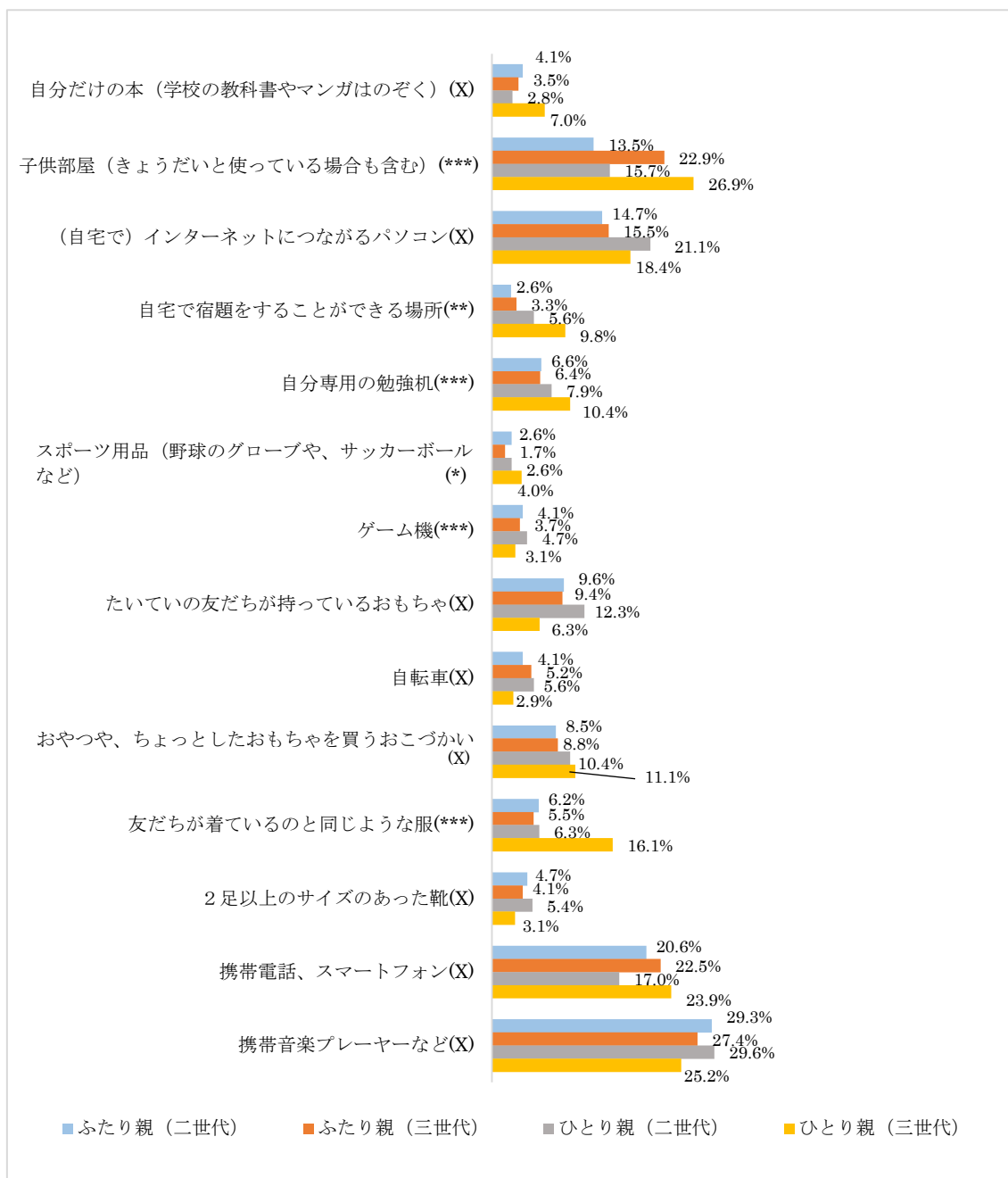
図表 2-2-3 所有物の状況(欲しいが、持っていない割合※):世帯タイプ別

小学5年生



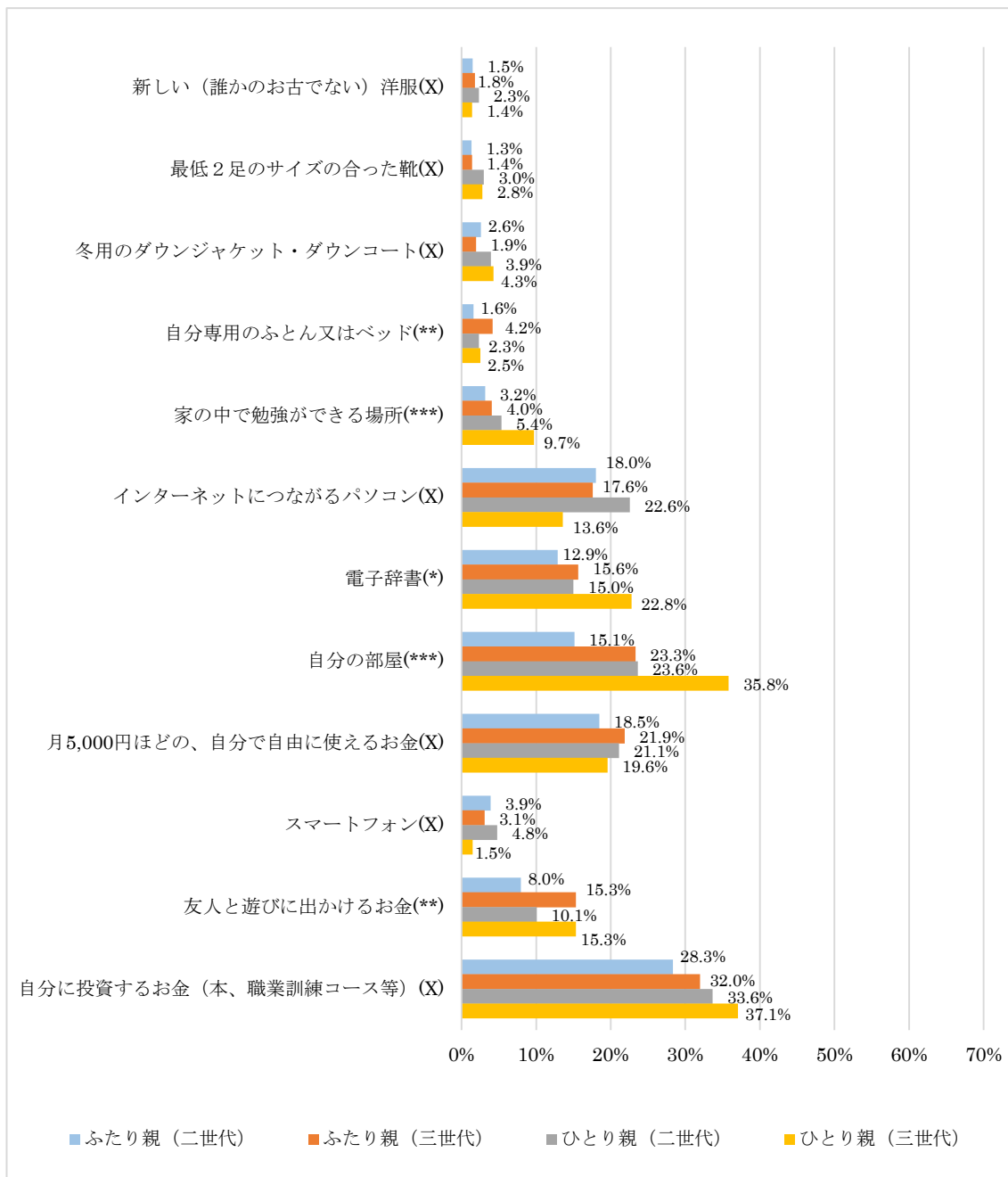
※ 「ない (欲しくない)」、「無回答」を分母から除いた割合

中学2年生



※「ない (欲しくない)」、「無回答」を分母から除いた割合

16-17 歳

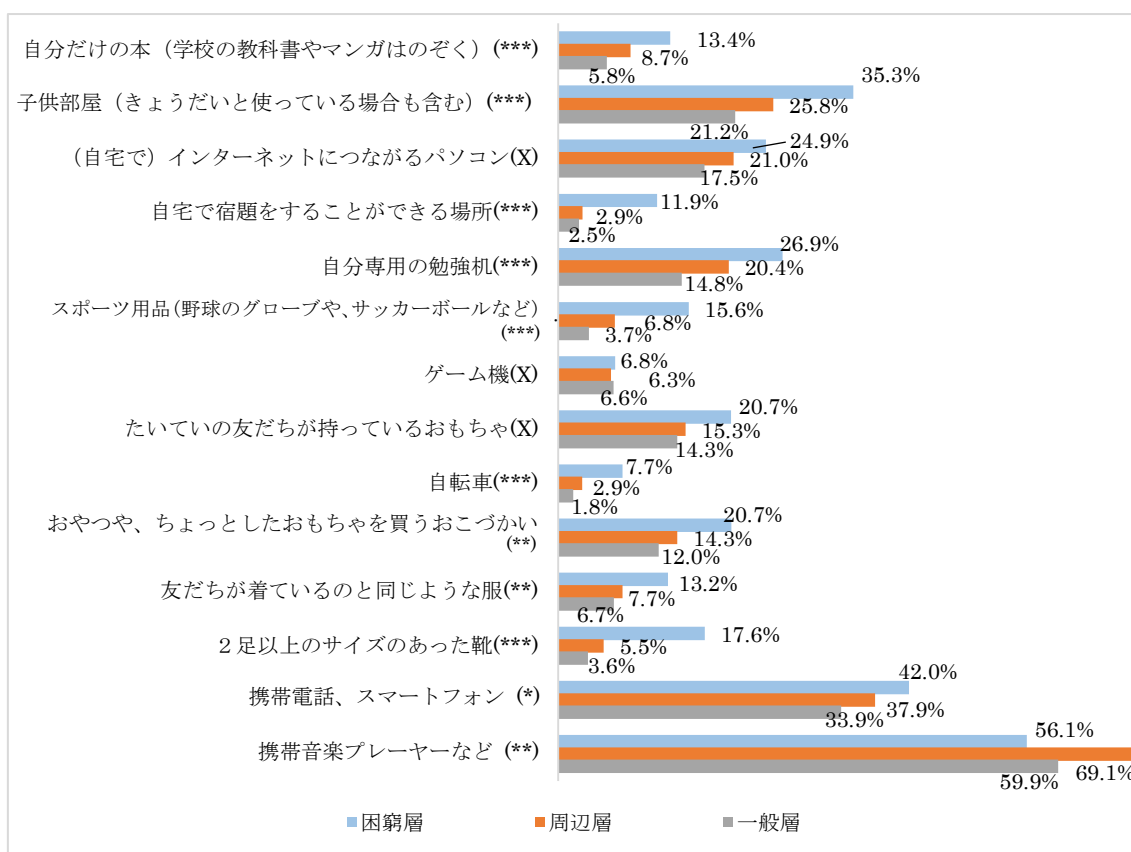


※「ない(欲しくない)」、「無回答」を分母から除いた割合

生活困難度別に見ると、小学5年生では、「自分だけの本」、「子供部屋」、「自宅で宿題をすることができる場所」、「自分専用の勉強机」、「スポーツ用品」、「自転車」、「おやつや、ちょっとしたおもちゃを買うおこづかい」、「友だちが着ているのと同じような服」、「2足以上のサイズのあった靴」、「携帯電話、スマートフォン」、「携帯音楽プレーヤーなど」において統計的に有意な差が見られた。中学2年生では、「ゲーム機」と「携帯電話、スマートフォン」以外の全てにおいて統計的に有意な差が見られた。なかでも「2足以上のサイズのあった靴」などの生活用品や「スポーツ用品（野球のグローブや、サッカーボール等）」などについて、生活困難度別の差が大きい。

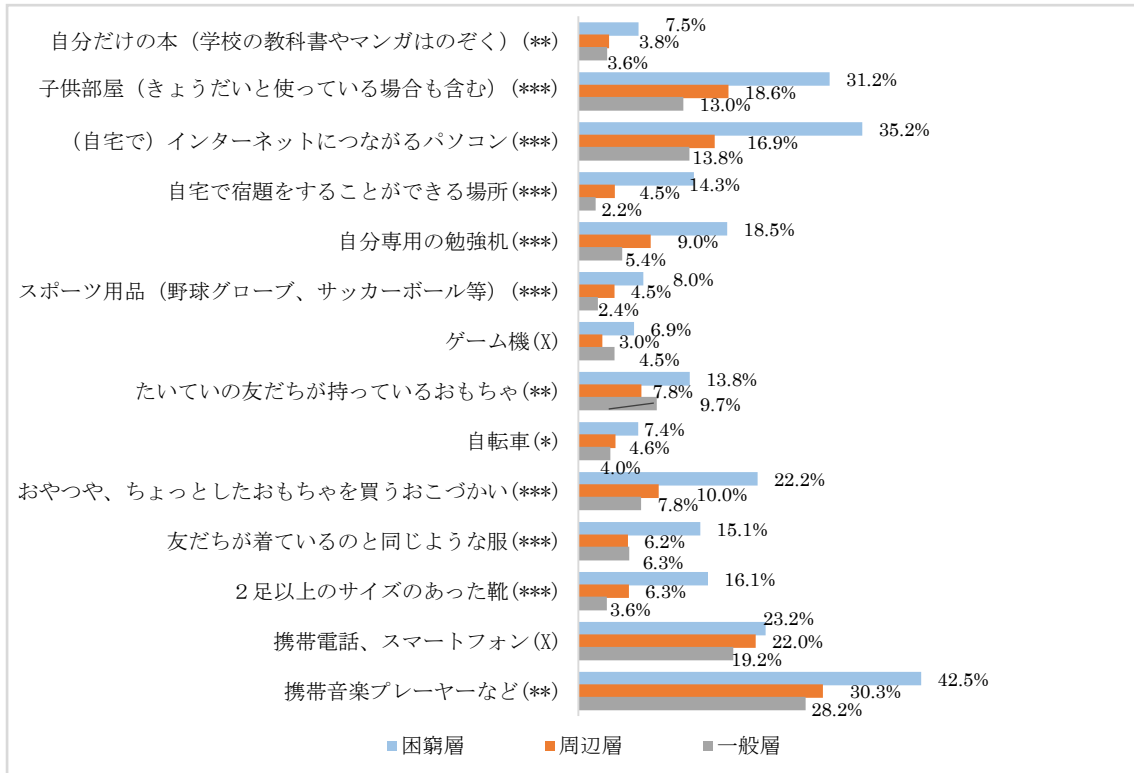
16-17歳では、統計的に有意な差がなかったのは「スマートフォン」のみであった。16-17歳の困窮層においては、「インターネットにつながるパソコン」、「電子辞書」、「自分に投資するお金」などの勉強資源において欠如している割合が3分の1を超える。

図表 2-2-4 所有物の状況(欲しいが、持っていない割合※):生活困難度別
小学5年生



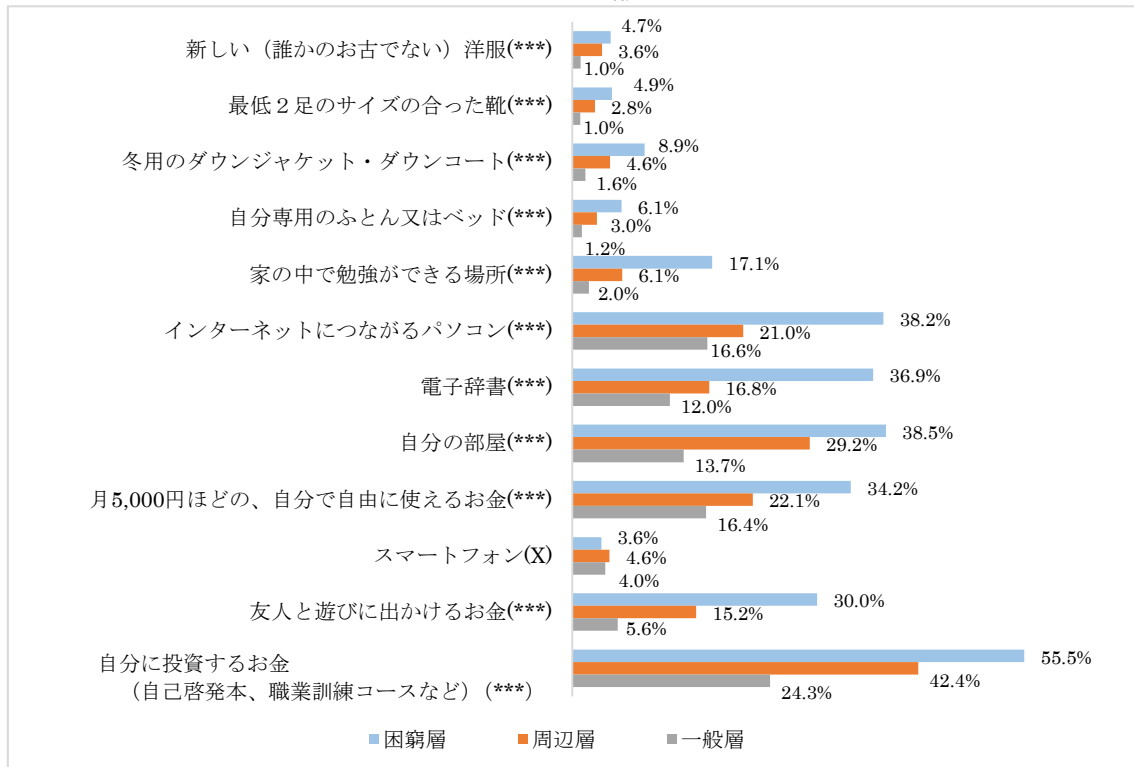
※ 「ない (欲しくない)」、「無回答」を分母から除いた割合

中学2年生



※「ない（欲しくない）」、「無回答」を分母から除いた割合

16-17歳



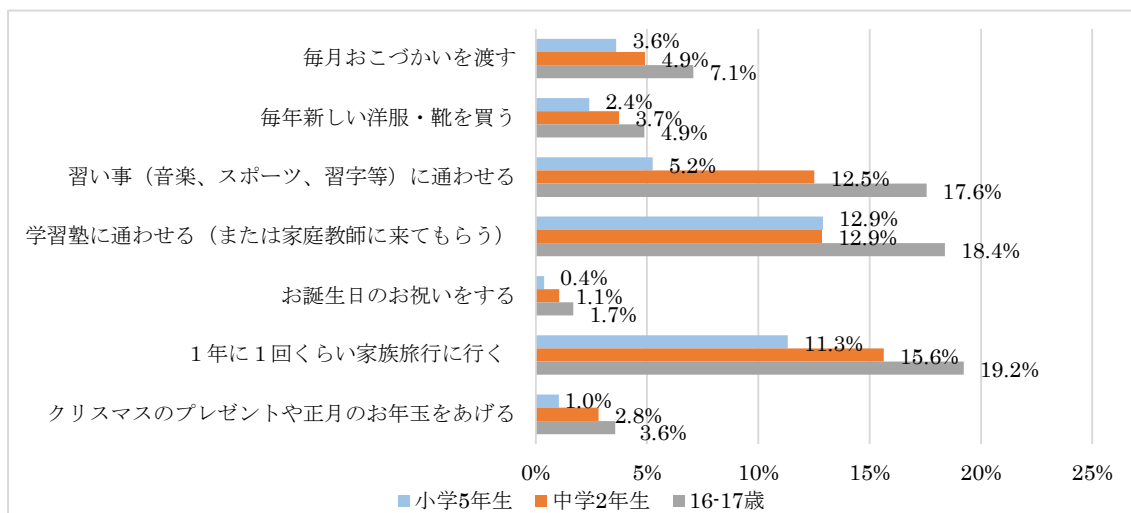
※「ない（欲しくない）」、「無回答」を分母から除いた割合

(2) 子供への支出

保護者に、子供に対して「毎月おこづかいを渡す」、「毎年新しい洋服・靴を買う」、「習い事（音楽、スポーツ、習字等）に通わせる」、「学習塾に通わせる（または家庭教師に来てもらう）」、「お誕生日のお祝いをする」、「1年に1回くらい家族旅行に行く」、「クリスマスのプレゼントや正月のお年玉をあげる」、「子供の学校行事などへ親が参加する」ことをしているか聞いた。家庭の方針などで支出していない場合もあるので、回答は「している」、「していない（方針でない）」、「経済的にできない」の選択肢を用意した。「経済的にできない」と回答した保護者の割合を、図表 2-2-5 に示す。

保護者が子供にしてあげたいのに「経済的にできない」とする割合が各年齢層において高い項目は、「1年に1回くらい家族旅行に行く」、「学習塾に通わせる（または家庭教師に来てもらう）」、「習い事（音楽、スポーツ、習字等）に通わせる」であり、それぞれ約1~2割となっている。この割合は、年齢の高い子供を持つ保護者の方が高く、16-17歳の保護者では、19.2%が「家族旅行」、18.4%が「学習塾（家庭教師）」、17.6%が「習い事」、7.1%が「毎月おこづかいを渡す」ことが「経済的にできない」と回答している。「毎年新しい洋服・靴を買う」、「クリスマスのプレゼントや正月のお年玉をあげる」、「お誕生日のお祝いをする」ことができないとする保護者は少ないものの、特に年齢の高い子供を持つ保護者ほどこれらが支出できないとする割合が高い。

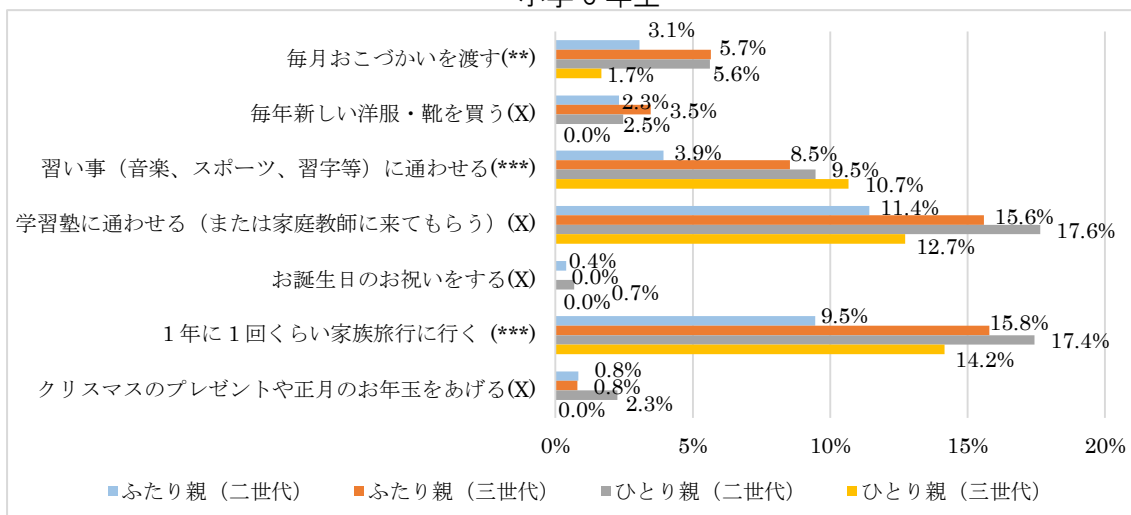
図表 2-2-5 「経済的にできない」子供のための支出



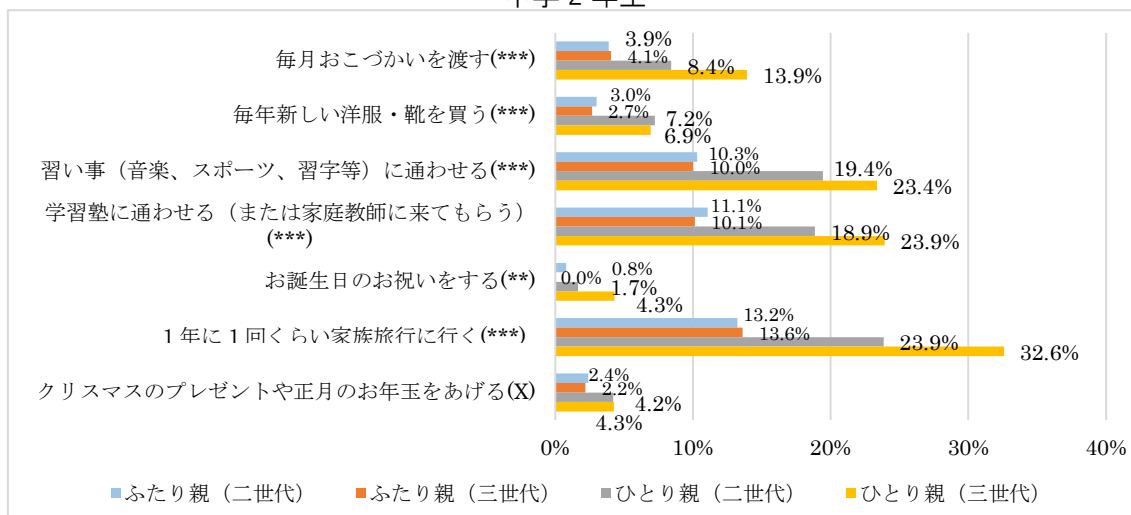
世帯タイプ別に見ると、小学5年生については「毎年新しい洋服・靴を買う」「学習塾に通わせる（または家庭教師に来てもらう）」、「お誕生日のお祝いをする」、「クリスマスのプレゼントや正月のお年玉をあげる」については統計的に有意な差がなかったが、中学2年生については、「クリスマスのプレゼントや正月のお年玉」以外は統計的に有意な差があり、ひとり親とふたり親の差が大きい。16-17歳においても、「お誕生日のお祝いをする」以外の全ての項目において、ひとり親はふたり親よりも「経済的にできない」とする割合が高くなっており、統計的にも有意な差が見られた。

図表 2-2-6 「経済的にできない」子供のための支出：世帯タイプ別

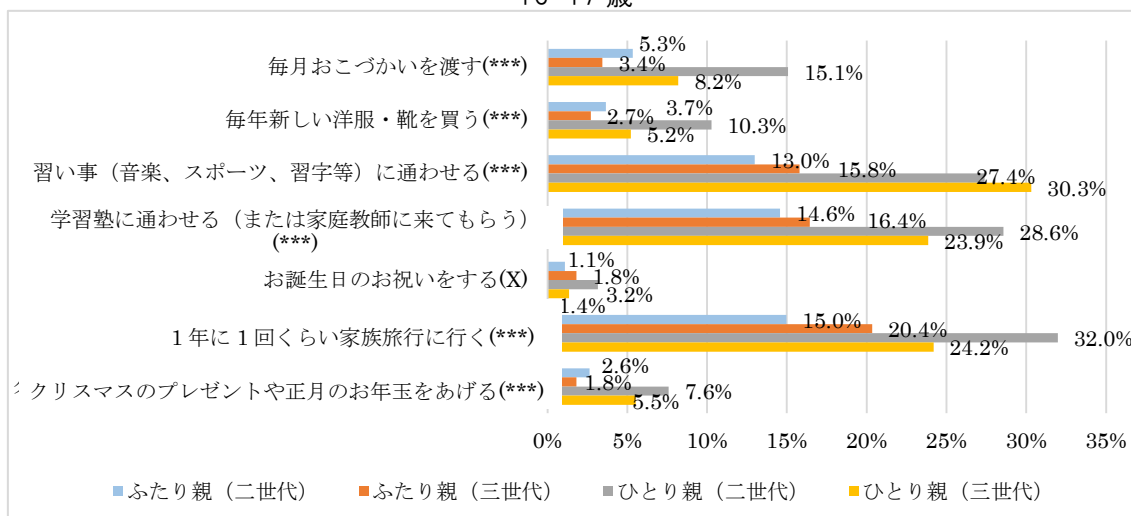
小学5年生



中学2年生



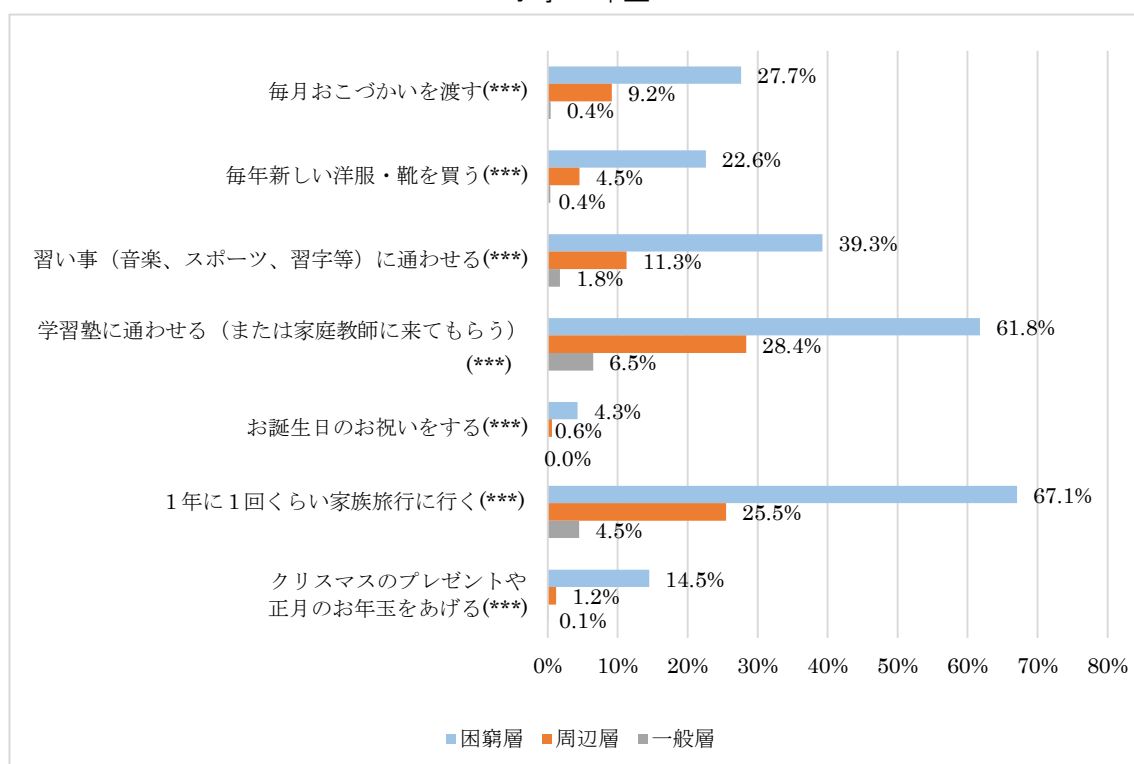
16-17歳



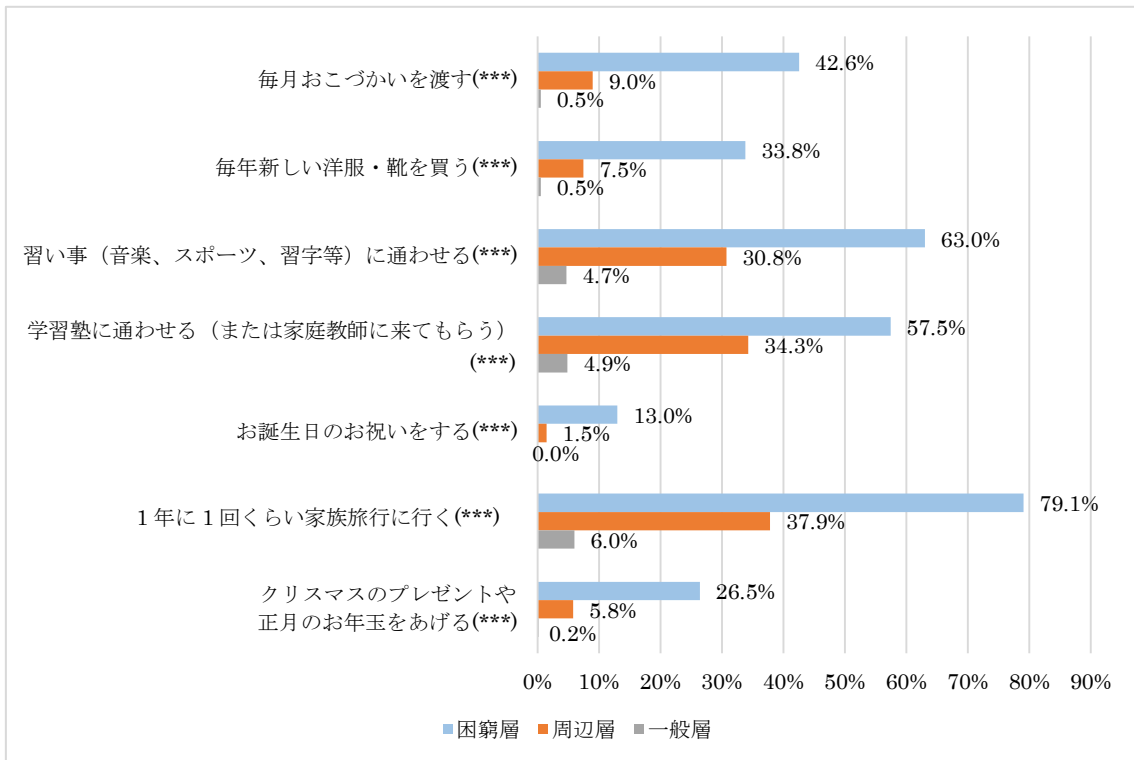
生活困難度別には、すべての項目において大きな有意差がある。すべての項目において、「経済的にできない」割合は一般層がいちばん低く 0%に近い数値となっているのに対し、困窮層では「1年に1回くらい海外旅行に行く」が 67.1%、「学習塾に通わせる（または家庭教師に来てもらう）」が 61.8%となっている。また、年齢が高い子供の方が、格差が大きい傾向がある。項目別には、「1年に1回くらい海外旅行に行く」、「学習塾に通わせる（または家庭教師に来てもらう）」、「習い事に通わせる」、「毎月おこづかいを渡す」などに大きな差がある。16-17歳の困窮層の保護者の約7割から8割は、「習い事に通わせる」、「学習塾に通わせる（または家庭教師に来てもらう）」、「1年に1回くらい家族旅行に行く」といった子供のための支出が「経済的にできない」としている

図表 2-2-7 「経済的にできない」子供のための支出：生活困難度別

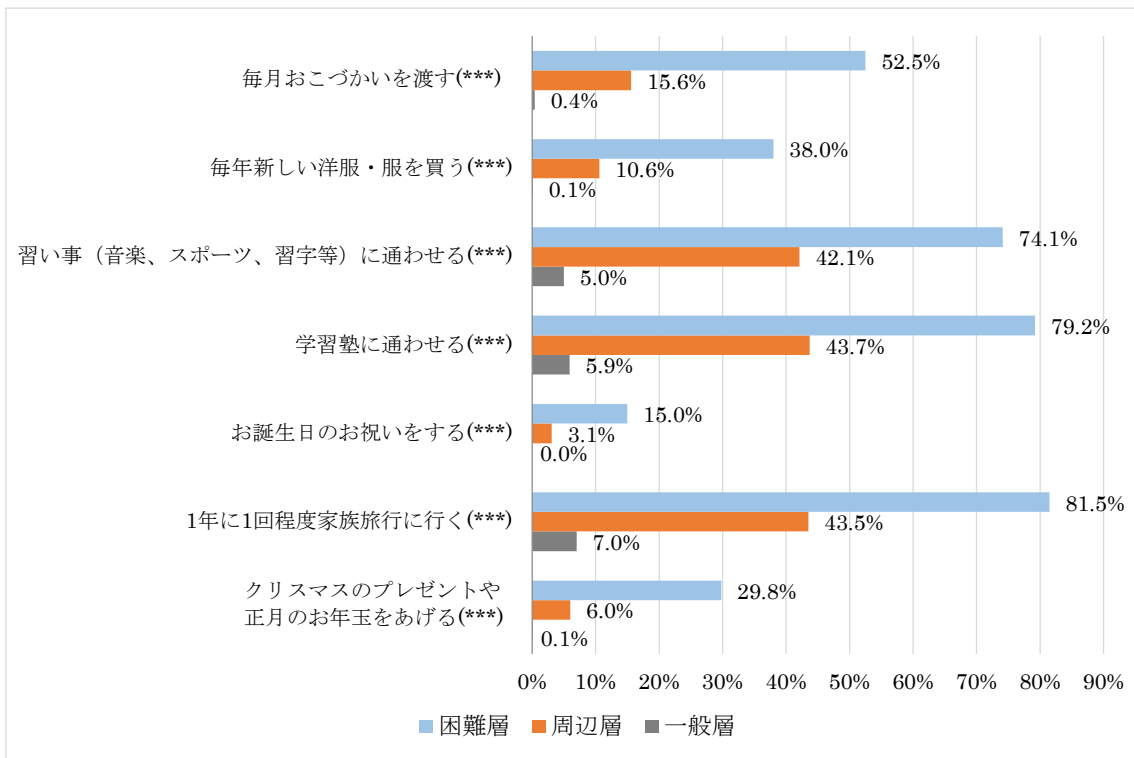
小学5年生



中学2年生



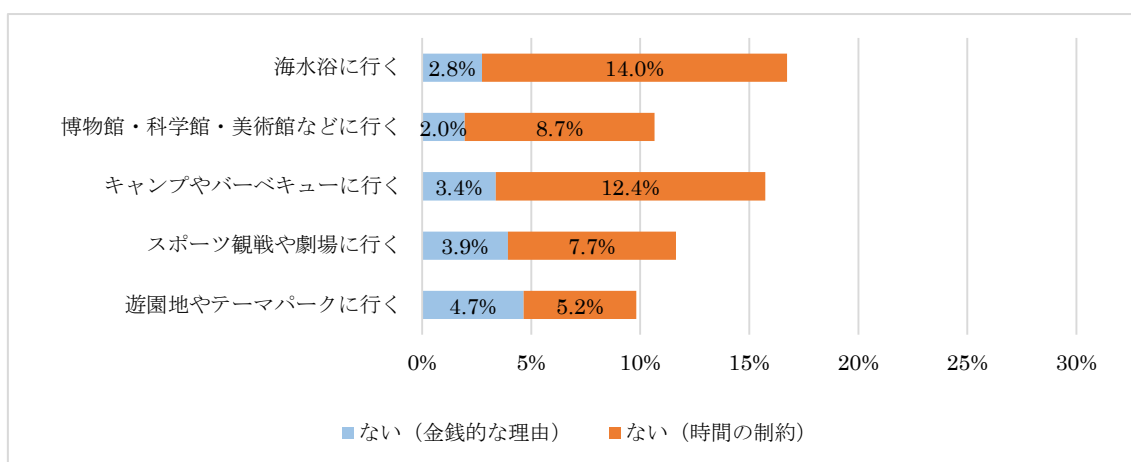
16-17歳



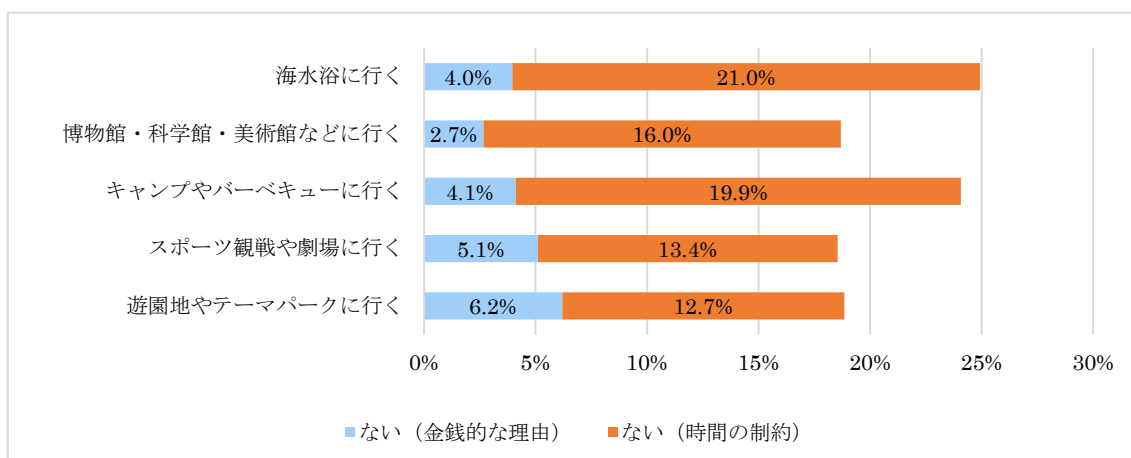
(3) 子供の体験（海水浴、博物館等）

小学5年生と中学2年生の保護者に、過去1年間において、「海水浴に行く」、「博物館・科学館・美術館などに行く」、「キャンプやバーベキューに行く」、「スポーツ観戦や劇場に行く」、「遊園地やテーマパークに行く」といった子供との体験があったかを聞いた。回答は、「ある」、「ない（金銭的な理由）」、「ない（時間の制約）」、「ない（その他の理由）」の4つの選択肢を示した。「金銭的な理由」で「ない」と答えた保護者の割合を見ると、小学5年生では2%から約5%、中学2年生では約3%から約6%となっている。すべての項目において「時間の制約」で「ない」は「金銭的な理由」で「ない」よりも割合が高くなっており、小学5年生では約5%～14%、中学2年生では約13%～21%の保護者が、これらの体験を「時間の制約」で子供としていない。

図表 2-2-8 以下の体験を「(金銭的な理由又は時間の制約で)過去1年間にしなかった」割合
小学5年生



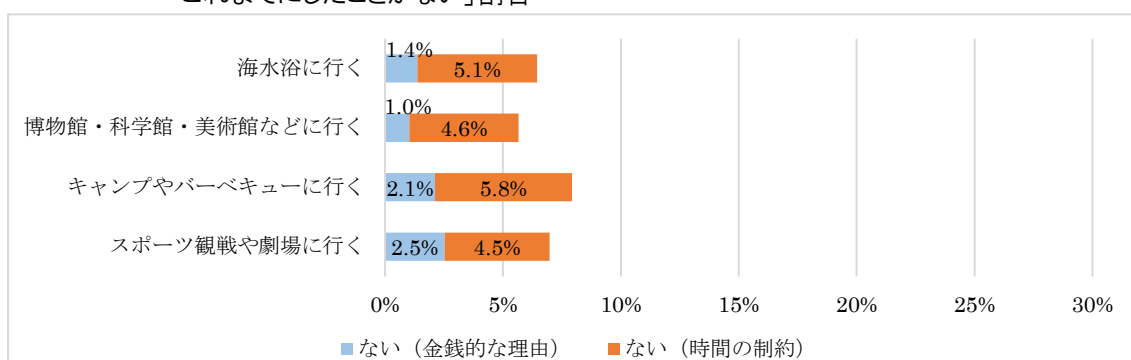
中学2年生



16-17歳の保護者に対しては、既に子供と一緒にこれらの体験をすることが少なくなると思われることから、「海水浴に行く」、「博物館・科学館・美術館などに行く」、「キャンプやバーベキューに行く」、「スポーツ観戦や劇場に行く」の項目について、「あなたのご家庭では、お子さんと次のような体験をする、またはこれまでにしたことがありますか」と聞いた。

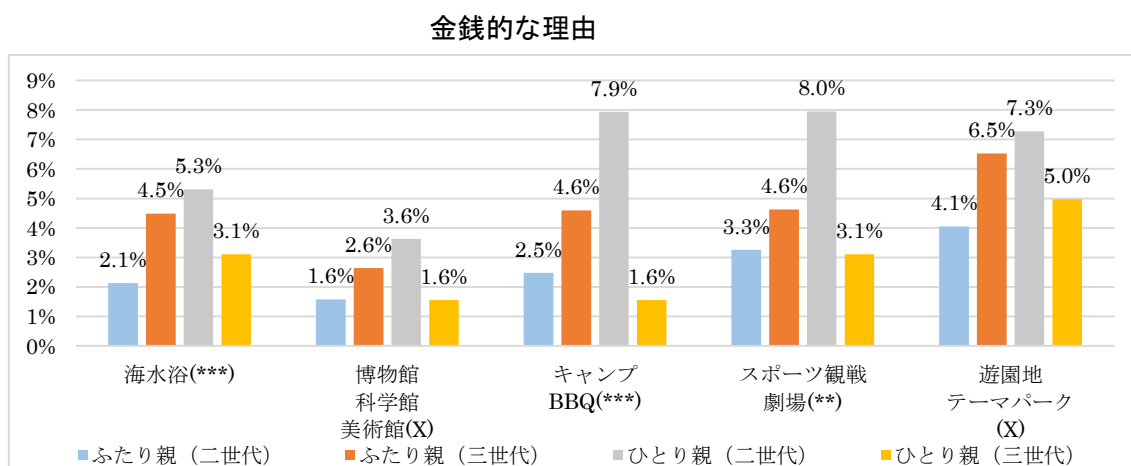
その結果、「海水浴」は6.5%、「博物館・科学館・美術館など」は5.6%、「キャンプやバーベキュー」は7.9%、「スポーツ観戦や劇場」は7.0%の保護者が、「金銭的な理由」又は「時間の制約」で子供と体験したことがないと答えている。

図表 2-2-9 (16-17歳の保護者)以下の体験を「(金銭的な理由で又は 時間の制約で) これまでにしたことがない」割合

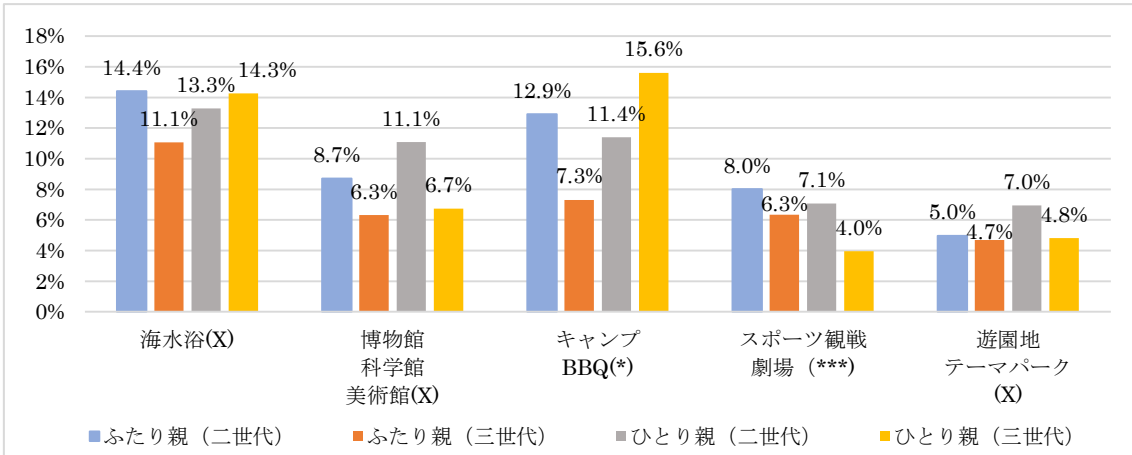


小学5年生の保護者について、世帯タイプ別に「金銭的な理由」又は「時間の制約」で体験がない子供の割合を見ると、「金銭的な理由」で体験がない割合は「海水浴に行く」、「キャンプやバーベキューに行く」、「スポーツ観戦や劇場に行く」において統計的に有意な差があり、ひとり親(二世帯)世帯がいちばん高い。「時間の制約」においては、統計的に有意な差があったのは「キャンプやバーベキューに行く」、「スポーツ観戦や劇場に行く」であった。

図表 2-2-10 体験がない割合:世帯タイプ別(小学5年生)



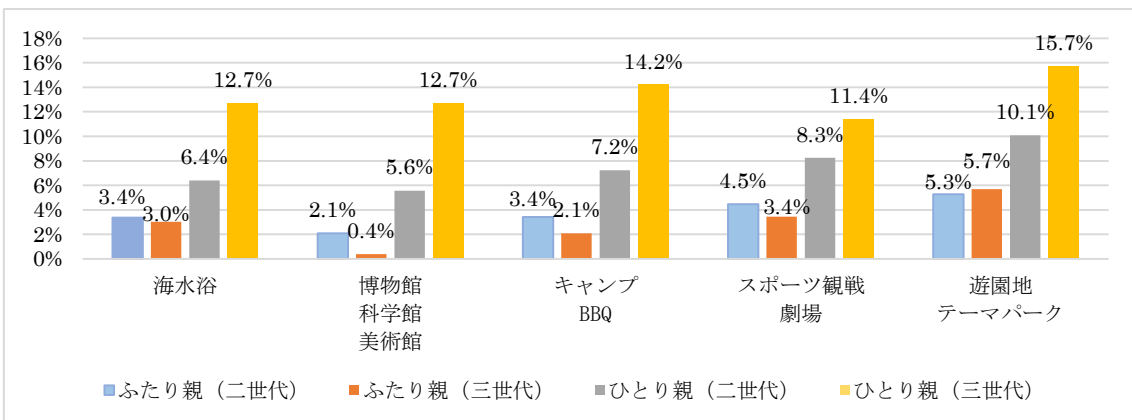
時間の制約



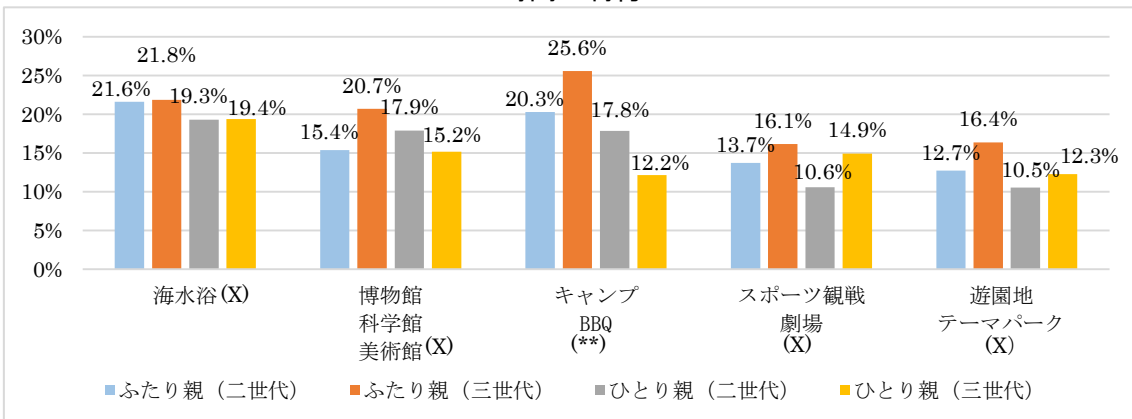
中学2年生については、世帯タイプ別では、「金銭的な理由」では全ての項目において統計的に有意な差があった。「時間の制約」では、「キャンプやバーベキューに行く」のみ、統計的に有意な差があった。

図表 2-2-11 体験がない割合：世帯タイプ別(中学2年生)

金銭的な理由 (***)



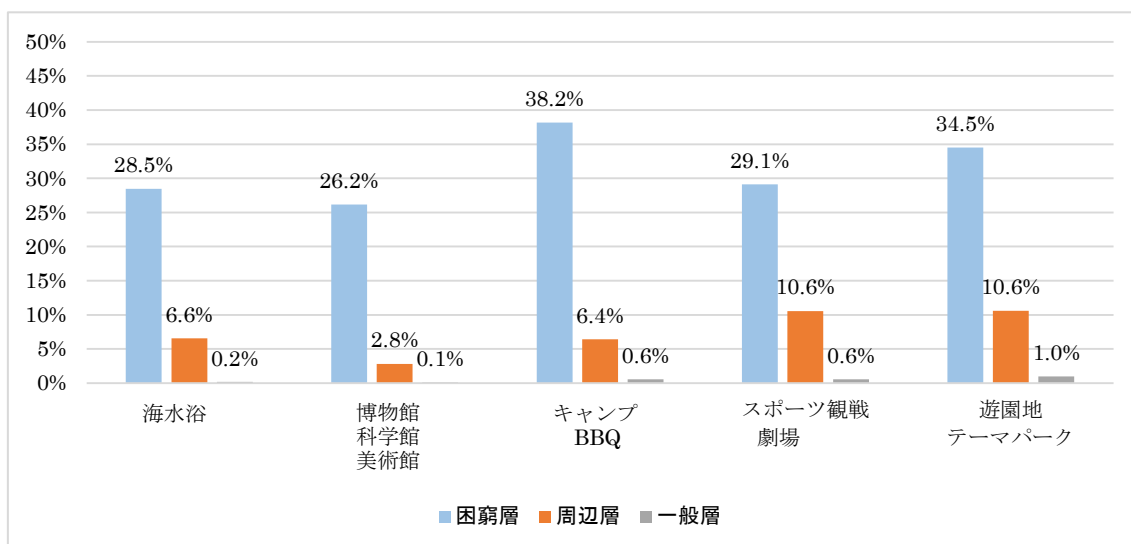
時間の制約



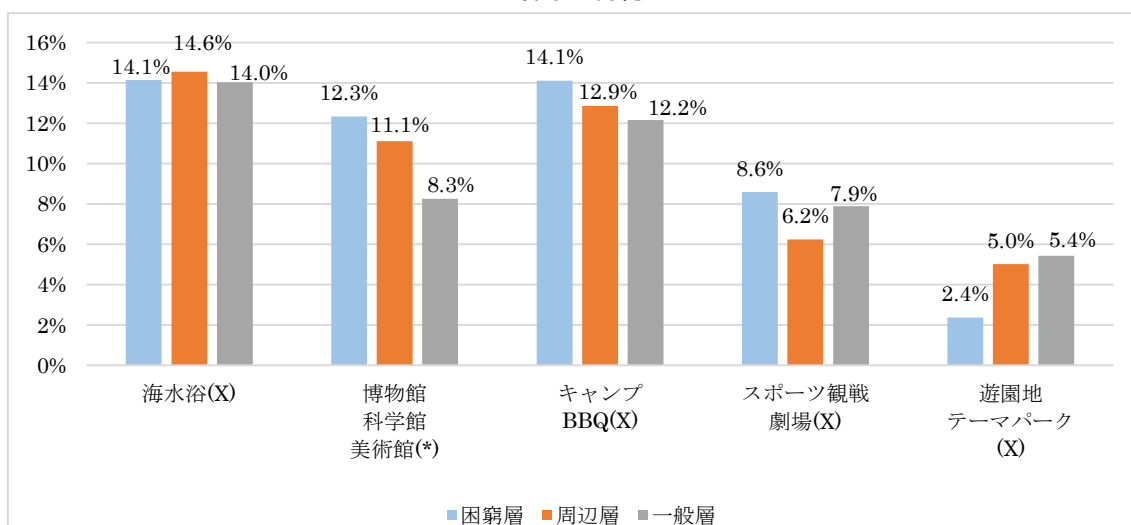
生活困難度別では、「金銭的な理由」で体験がない割合は大きな差があり、困窮層においては、小学5年生の保護者の約26%～約38%、中学2年生の保護者の約28%～約45%が、「金銭的な理由」でこれらの体験ができなかったと回答している。一般層においては、この割合は1%以下である。「時間の制約」については、統計的に有意な差は、小学5年生では「博物館・科学館・美術館などに行く」、中学2年生では「博物館・科学館・美術館などに行く」、「キャンプやバーベキューに行く」、「遊園地やテーマパークに行く」の項目で統計的な有意差が見られる。どの層においても、小学5年生は約1割の保護者が、中学2年生は約1～2割の保護者が、「時間の制約」によりこれらの体験ができないとしている。

図表 2-2-12 体験がない割合：生活困難度別(小学5年生)

金銭的な理由(***)

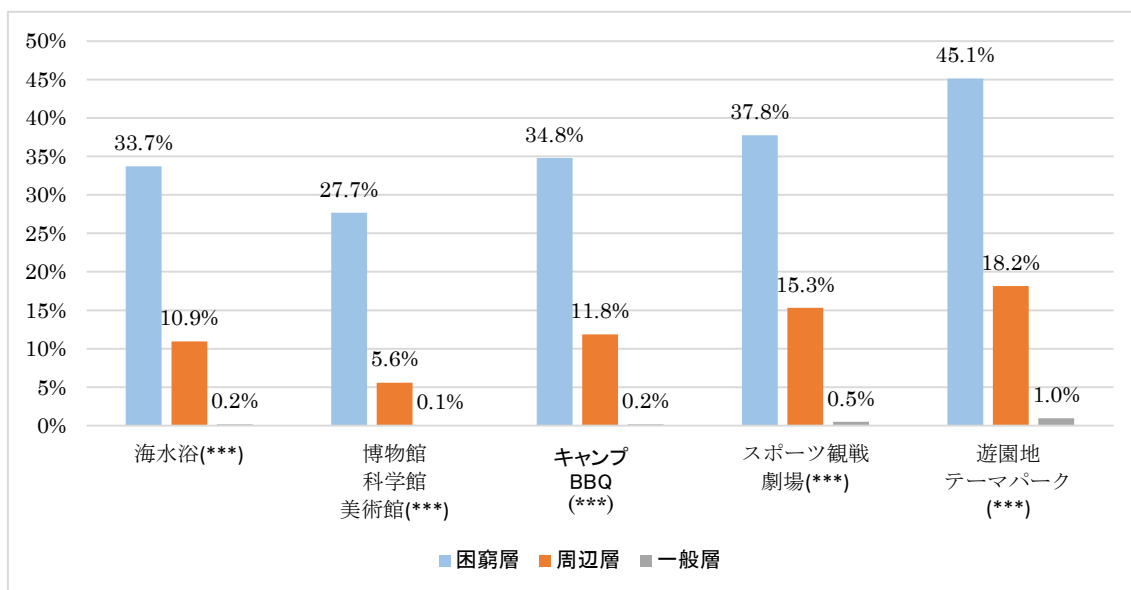


時間の制約

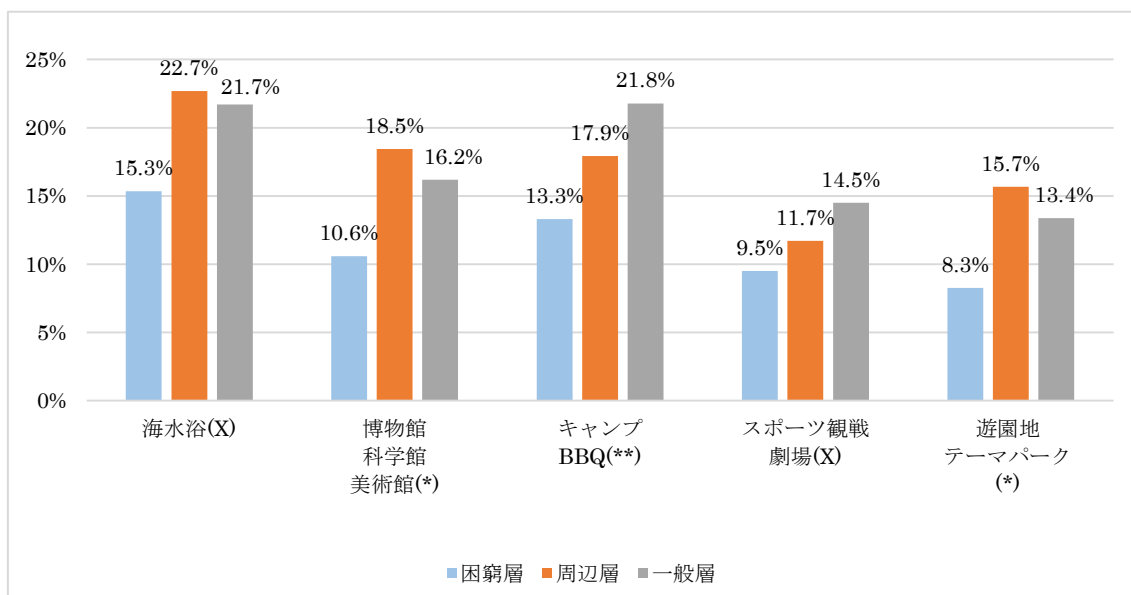


図表 2-2-13 体験がない割合：生活困難度別(中学2年生)

金銭的な理由



時間の制約



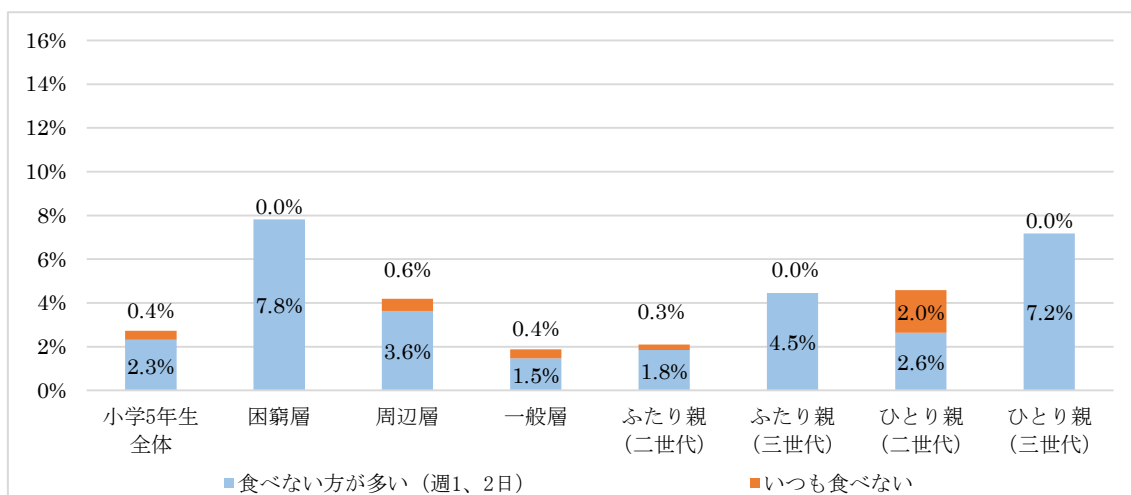
3 子供の食と栄養

(1) 朝食の摂取状況

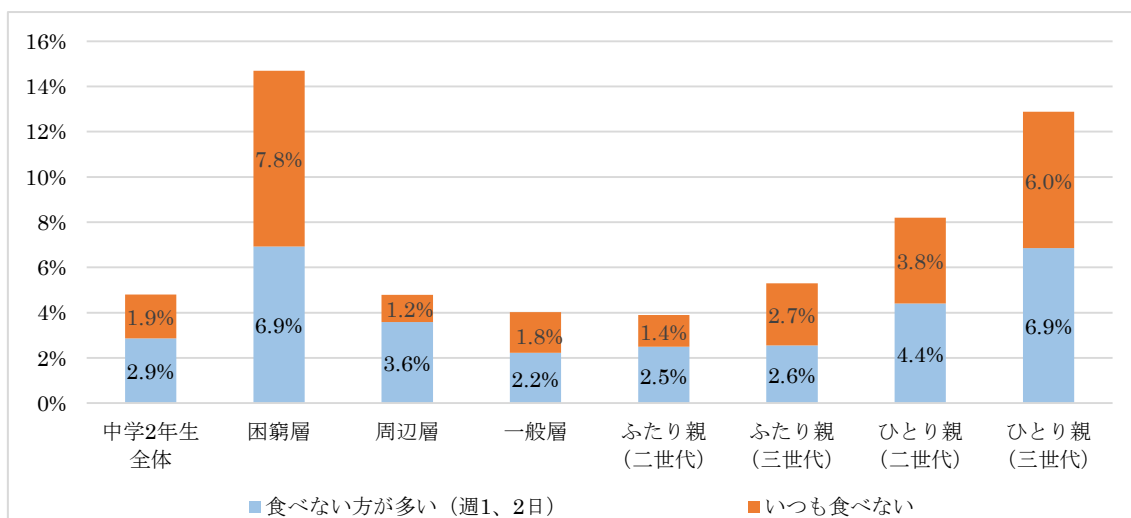
朝食は、子供の成長と健康にとって重要である。そこで、子供に、平日に朝ごはんを食べる頻度を聞いた。小学5年生は、無回答を除いても9割以上の子供が平日に朝食を毎日食べている一方で、貧困層の子供の7.8%が「食べない方が多い」、「いつも食べない」と回答しており、一般層の1.9%、周辺層の4.2%に比べて高い割合である。ひとり親(三世帯)世帯においても、「食べない方が多い」が7.2%存在するほか、ひとり親(二世帯)世帯では「いつも食べない」とした子供も2.0%存在する。中学2年生では、「いつも食べない」が急激に増え、中学2年生全体では1.9%であるものの、困窮層では7.8%、ひとり親(三世帯)世帯では6.0%となっている。

図表 2-3-1 平日(学校に行く日)に朝ごはんを食べる頻度(小学5年生、中学2年生)

小学5年生(生活困難度別***、世帯タイプ別***)

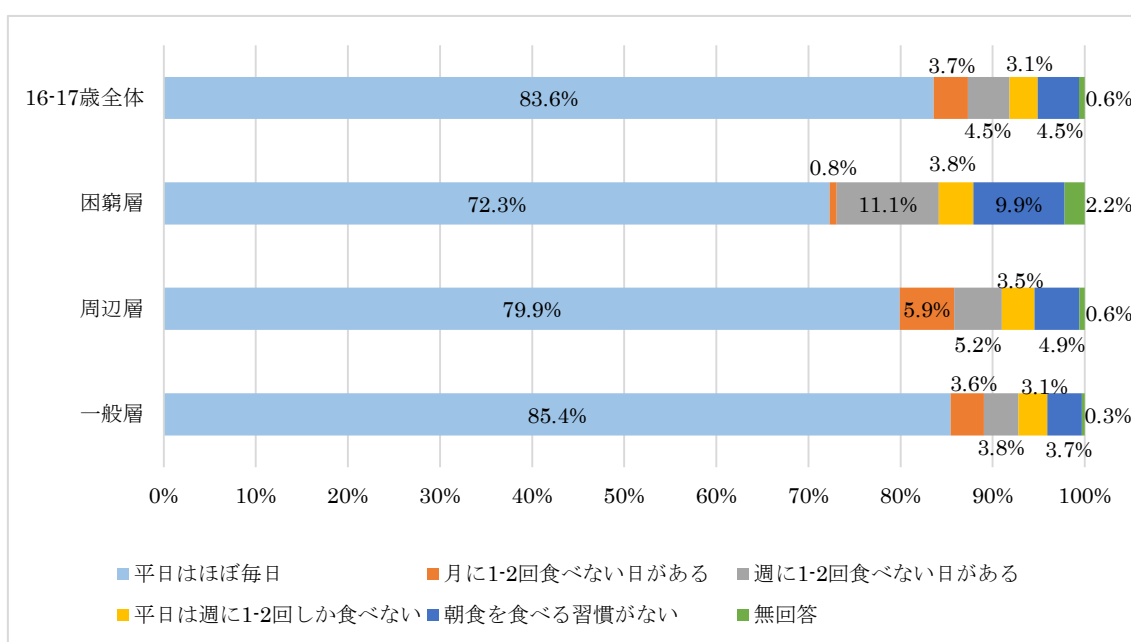


中学2年生(生活困難度別***、世帯タイプ別***)

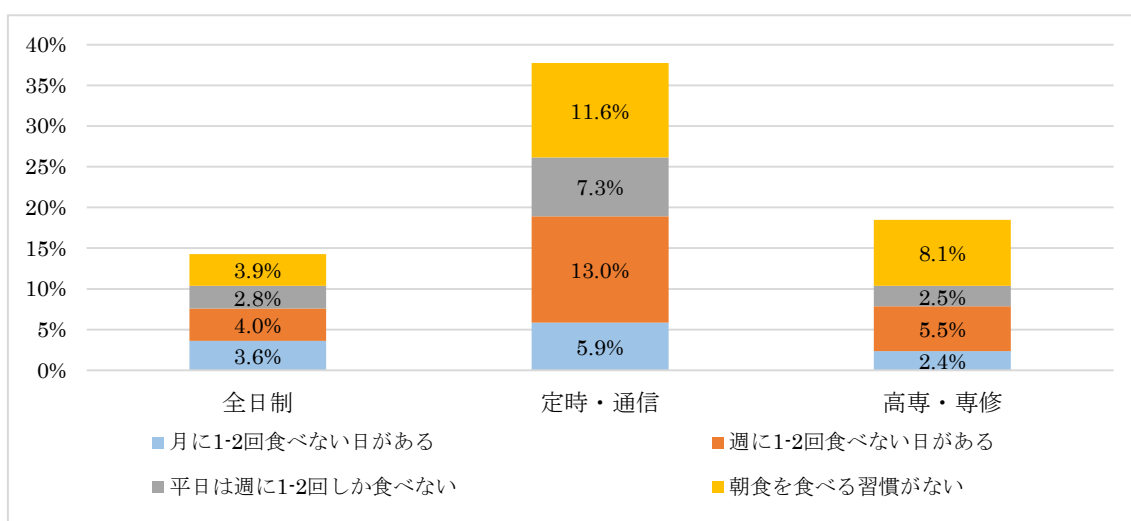


16-17歳には朝食を食べない子供がさらに増え、全体の4.5%が「朝食を食べる習慣がない」、3.1%が「平日は週に1～2回しか食べない」と回答している。困窮層においては、毎日朝食を食べるのは72.3%となっており、周辺層や一般層よりも低い。学校タイプ別にこの割合を見ると、定時・通信制の高校に通う生徒の朝食欠食の割合が最も高く、11.6%が「朝食を食べる習慣がない」、7.3%が「平日は週に1～2回しか食べない」としている。

図表 2-3-2 平日(学校や仕事に行く日)に朝ごはんを食べる頻度(16-17歳)
生活困難度別(***)



学校タイプ別(***)

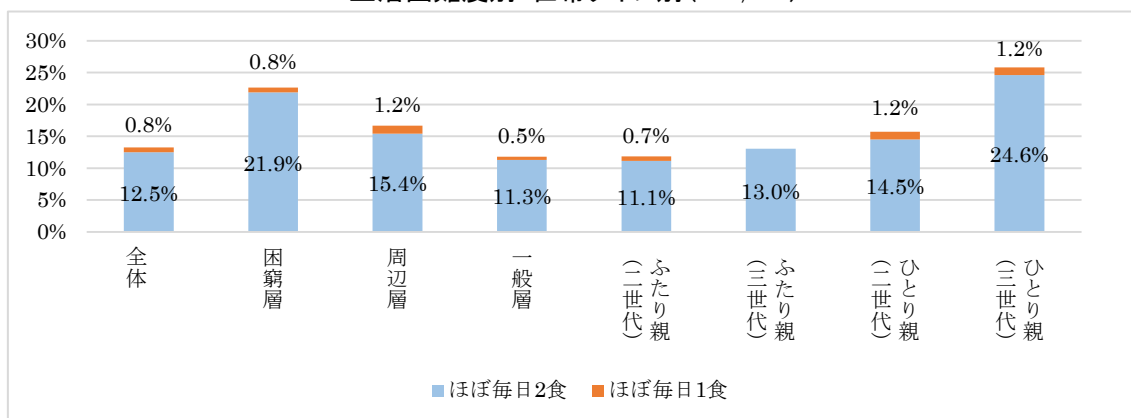


(2) 食事の回数 (16-17 歳)

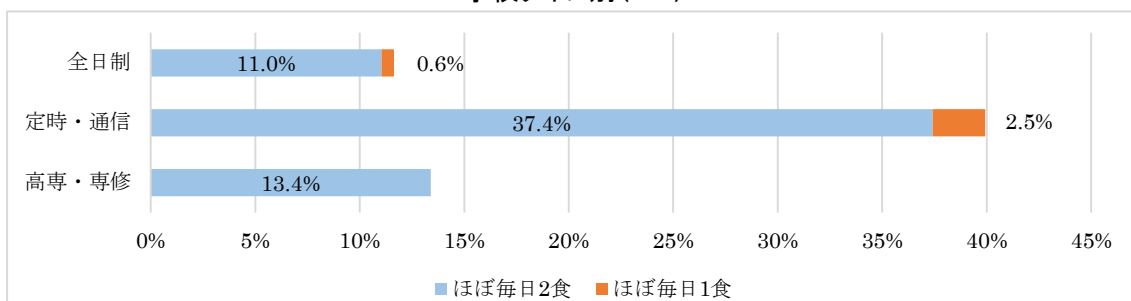
16-17 歳の平日 (学校や仕事に行く日) の一日の食事の回数 (平均) を聞いたところ、16-17 歳の 12.5% は「ほぼ毎日 2 食」、0.8% が「ほぼ毎日 1 食」と回答している。2 食以下の子供の割合は、困窮層では 22.7%、ひとり親 (三世帯) 世帯では 25.8% となっている。学校タイプ別には、「定時制・通信制」の生徒の 39.9% は毎日 2 食以下となっており、「ほぼ毎日 1 食」も 2.5% であった。

図表 2-3-3 食事の回数が平日 (学校や仕事に行く日) 2 食 (/ 日) 以下の割合 (16-17 歳)

生活困難度別・世帯タイプ別 (***,***)

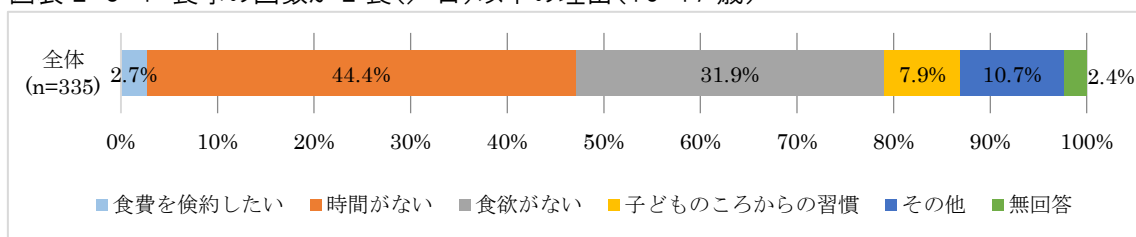


学校タイプ別 (***)



平日の食事の回数が「ほぼ 1 食」と「ほぼ 2 食」の 16-17 歳に、その主な理由を聞いたところ、最も高かったのは「時間がない」の 44.4%、次が「食欲がない」の 31.9% であった。「食費を節約したい」は 2.7% であった。

図表 2-3-4 食事の回数が 2 食 (/ 日) 以下の理由 (16-17 歳)



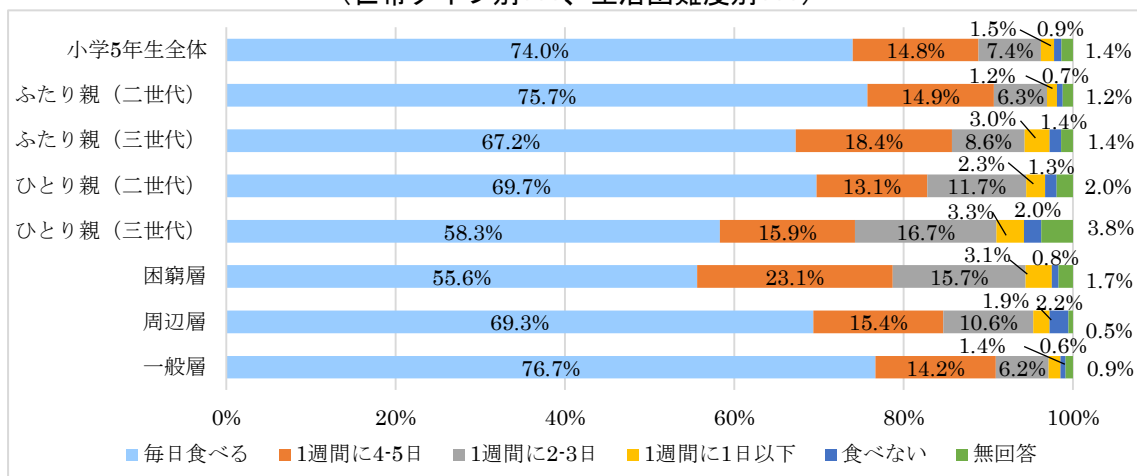
(3) 栄養群の摂取状況

次に、小学5年生と中学2年生に、「給食を除いて、以下の食物をふだんどれくらい食べますか」と聞いた。

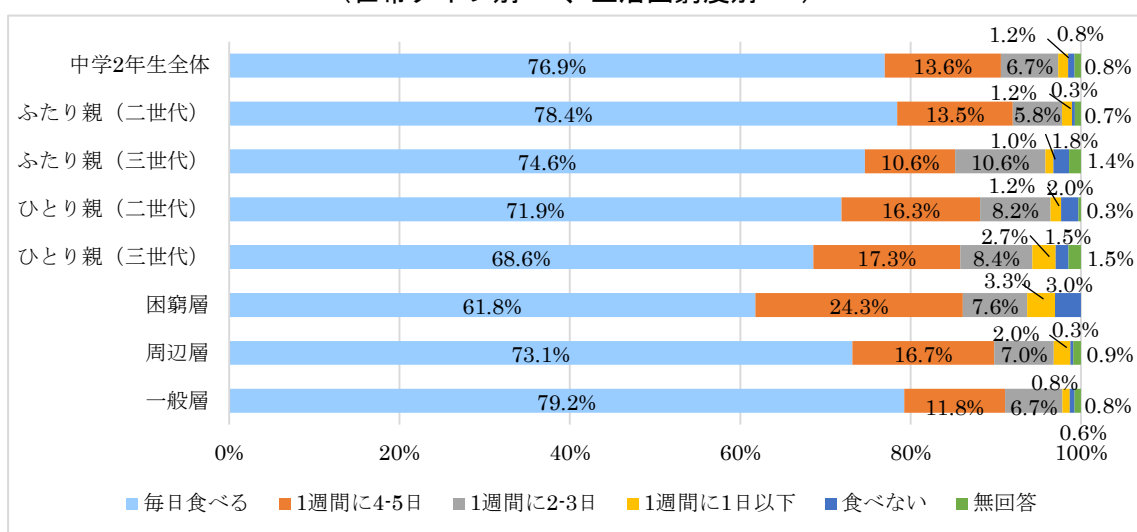
①野菜

「野菜」については、小学5年生の74.0%、中学2年生の76.9%が「毎日食べる」としているが、「1週間に2～3日」(小学5年生7.4%、中学2年生6.7%)、「1週間に1日以下」(小学5年生1.5%、中学2年生1.2%)、「食べない」(小学5年生0.9%、中学2年生0.8%)となっている。小学5年生においては、生活困難度別では困窮層、世帯タイプ別ではひとり親(三世帯)世帯で野菜の摂取の頻度が低い。困窮層の子供の19.6%、ひとり親(三世帯)世帯の子供の22.0%が、給食以外で野菜を食べるのは1週間に2～3日以下と答えている。

図表 2-3-5 野菜の摂取の頻度(小学5年生)
(世帯タイプ別***、生活困難度別***)



図表 2-3-6 野菜の摂取の頻度(中学2年生)
(世帯タイプ別***、生活困難度別***)



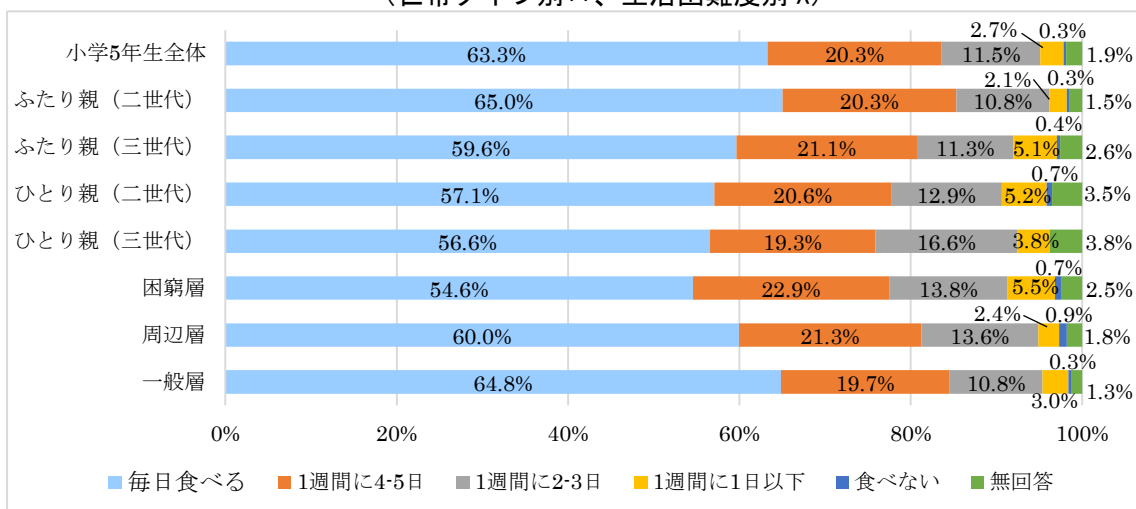
②肉か魚

「肉か魚」については、小学5年生の63.3%、中学2年生の73.5%は「毎日食べる」、小学5年生の20.3%と中学2年生の18.0%は「1週間の4～5日」としており、約8割から約9割の子供は給食以外においても「肉か魚」をほとんどの日においてに摂取している。「1週間に2～3日」は小学5年生では11.5%、中学2年生では6.2%、「1週間に1日以下」は小学5年生では2.7%、中学2年生では0.9%、「食べない」は小学5年生では0.3%、中学2年生では0.5%であった。

世帯タイプ別及び生活困難度別に見ると、小学5年生では世帯タイプ別に、中学2年生では生活困難度別に統計的に有意な差が見られた。中学2年生では一般層と周辺層において「毎日食べる」が7割以上になるのに対し、困窮層は6割以下である。

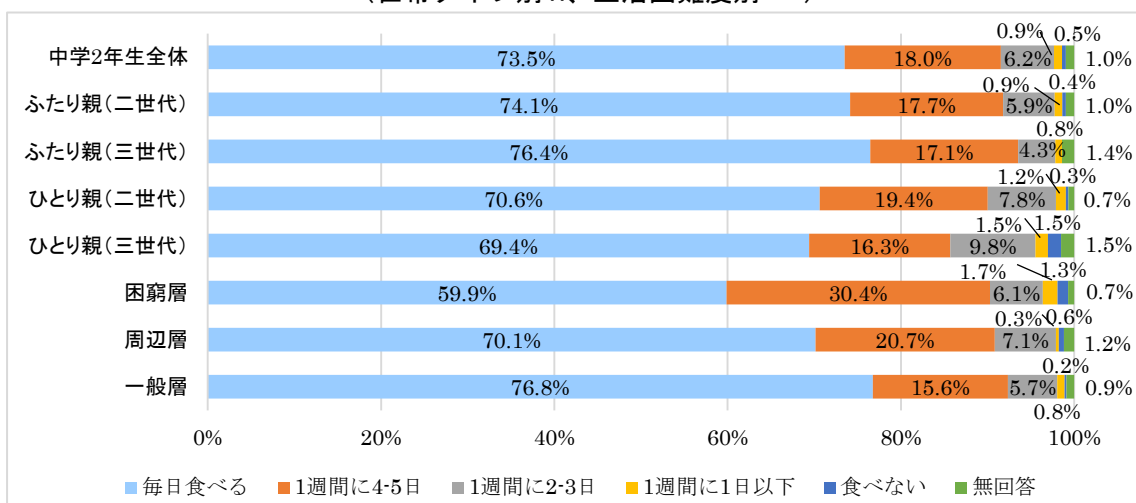
図表 2-3-7 肉か魚の摂取の頻度(小学5年生)

(世帯タイプ別**、生活困難度別X)



図表 2-3-8 肉か魚の摂取の頻度(中学2年生)

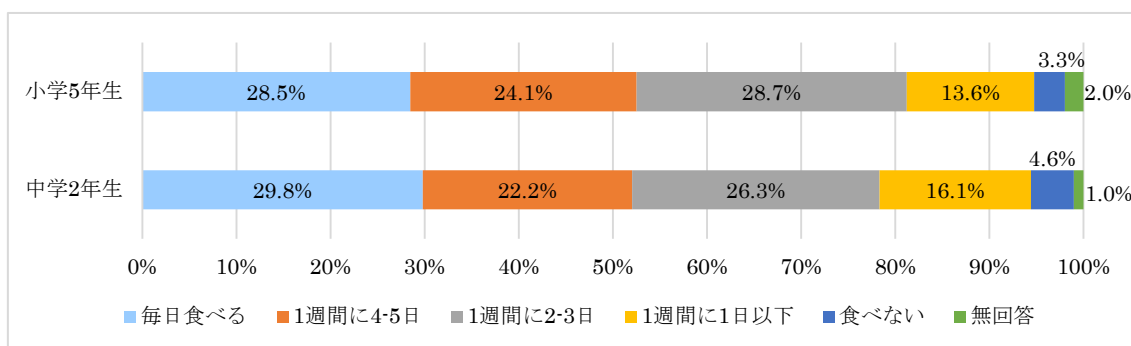
(世帯タイプ別X、生活困難度別***)



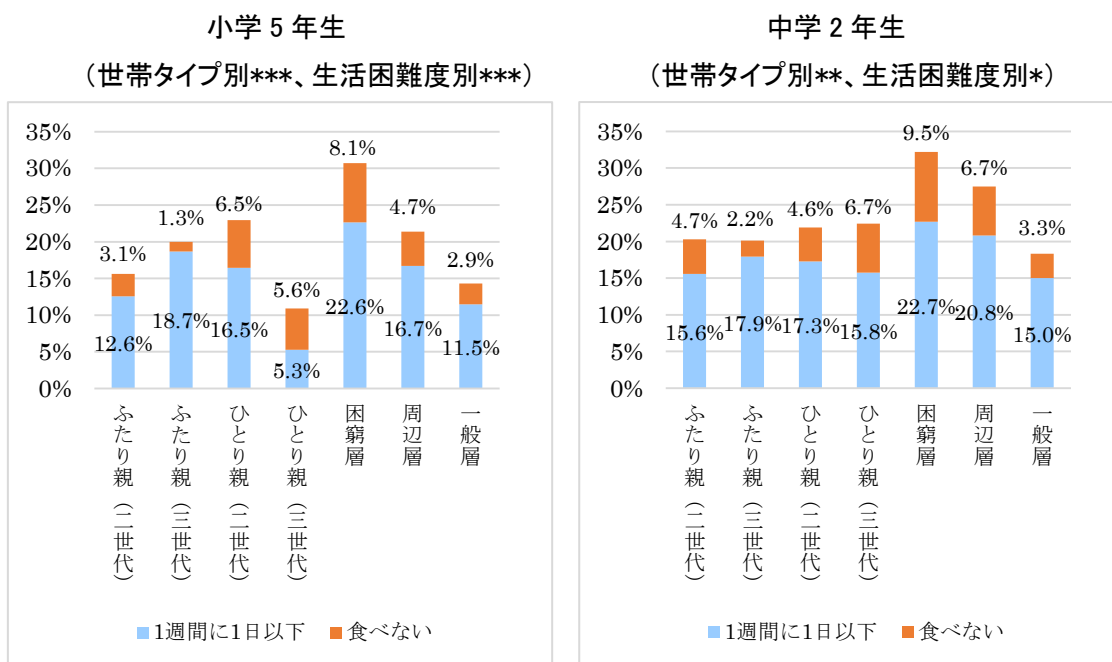
③果物

「果物」については、小学5年生では28.5%が「毎日食べる」、24.1%が「1週間に4～5日」、中学2年生では29.8%が「毎日食べる」、22.2%が「1週間に4～5日」としており、過半数の小中学生は1週間に4～5日以上、給食以外にも果物を食べている。しかし、「1週間に1日以下」と回答した子供が小学5年生では13.6%、中学2年生では16.1%、「食べない」と回答した子供は、小学5年生では3.3%、中学2年生では4.6%となっている。果物を給食以外に食べる回数が少ない子供の割合は、生活困難度別に統計的に有意な差があり、困窮層では3割以上の子供が1週間に1回以下である。

図表 2-3-9 果物の摂取の頻度(小学5年生、中学2年生)



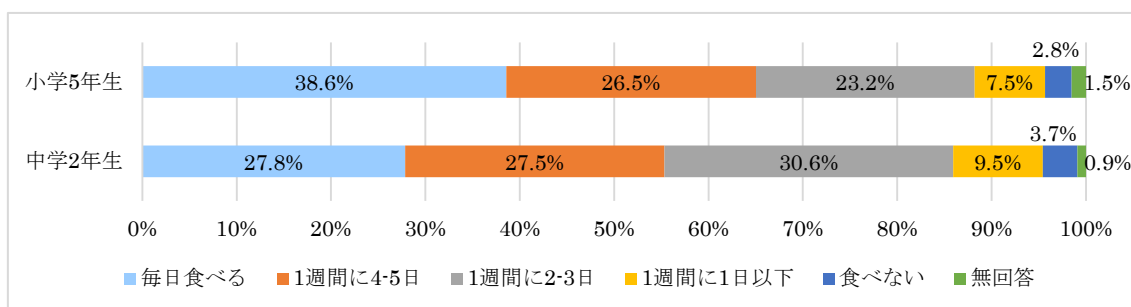
図表 2-3-10 果物の摂取が1週間に1日以下の子供の割合



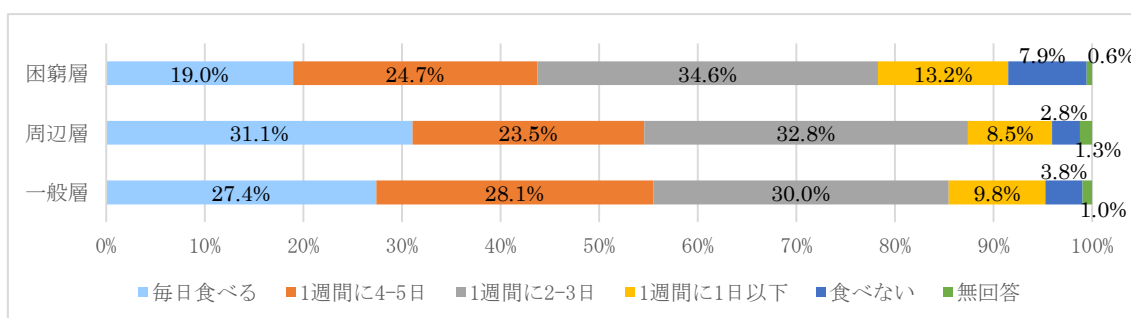
④お菓子

「お菓子」については、小学5年生の38.6%、中学2年生の27.8%が「毎日食べる」と回答している。小学5年生においては、世帯タイプ別及び生活困難度別にはお菓子を食べる頻度に有意差は見られなかった。しかし、中学2年生においては、困窮層でお菓子の摂取の頻度が他の層に比べて低く、「1週間に1日以下」(13.2%)、「食べない」(7.9%)という子供が2割を超える。

図表 2-3-11 お菓子の摂取の頻度(小学5年生、中学2年生)



図表 2-3-12 お菓子の摂取の頻度(中学2年生):生活困難度別(***)

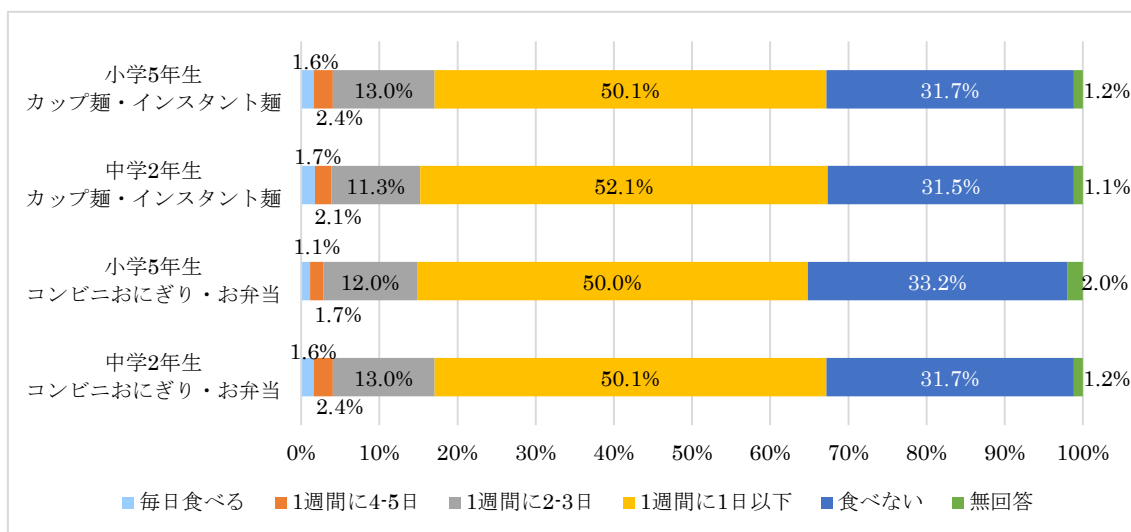


⑤カップ麺・インスタント麺、コンビニのおにぎり・お弁当

小学5年生と中学2年生において、カップ麺・インスタント麺、コンビニのおにぎり・お弁当を1週間に4~5日以上食べる子供は、小学5年生ではカップ麺・インスタント麺は4.0%、おにぎり・お弁当は2.8%、中学2年生でもそれぞれ3.8%、4.0%と、比較的低い。約半数の子供は「1週間に1日以下」、約3割の子供は「食べない」と回答している。

しかしながら、世帯タイプ別や生活困難度別に食べる頻度に統計的に有意な差があり、困窮層とひとり親(三世帯)世帯ではこれらの食品の摂取の頻度が高い。カップ麺・インスタント麺について、中学2年生においては、困窮層では10.3%の子供が「毎日食べる」、「1週間に4~5日」と回答している。

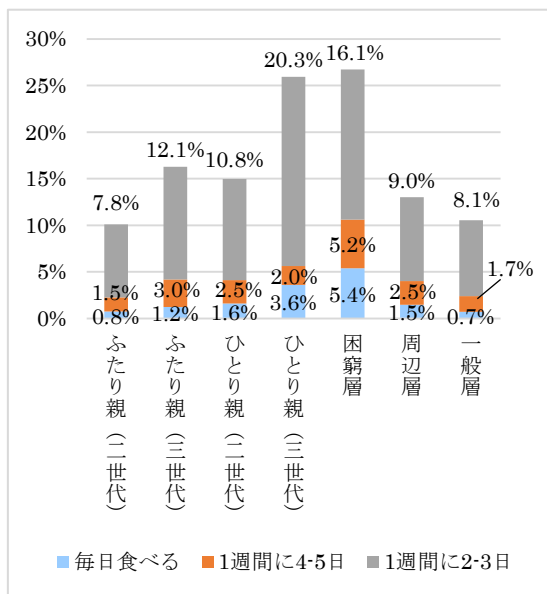
図表 2-3-13 カップ麺・インスタント麺、コンビニのおにぎり・お弁当の摂取の頻度
(小学5年生、中学2年生)



図表 2-3-14 カップ麺・インスタント麺の摂取の頻度：世帯タイプ別・生活困難度別

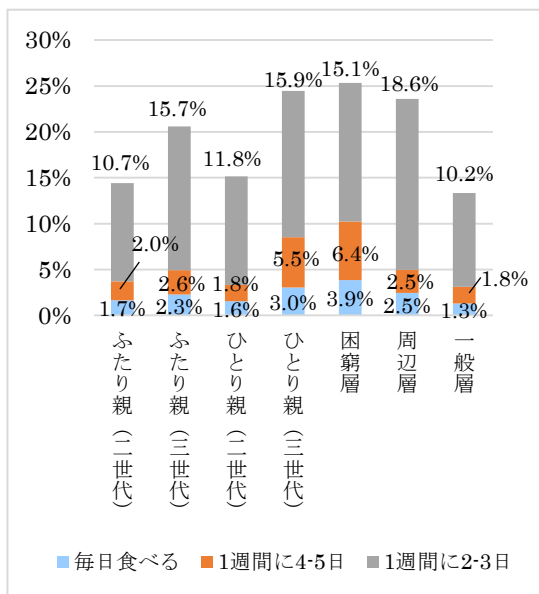
小学5年生

(世帯タイプ別***、生活困難度別***)



中学2年生

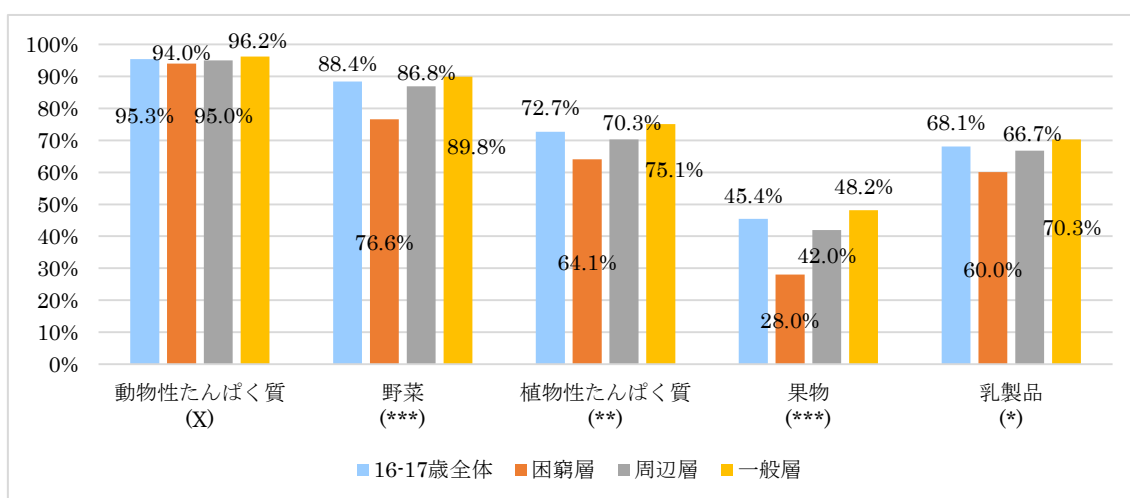
(世帯タイプ別X、生活困難度別***)



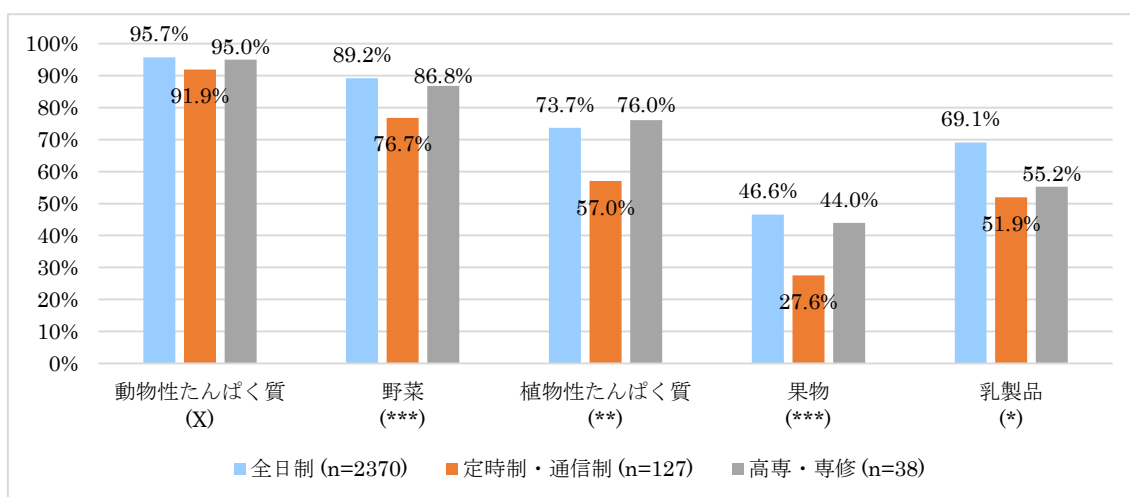
(4) 16-17 歳の食品群別の摂取頻度

16-17 歳に、「肉、魚、卵などの動物性たんぱく質」、「野菜」、「大豆・小麦などの植物性たんぱく質」、「果物」、「牛乳・ヨーグルト・チーズなどの乳製品」について「少なくとも 1 日に 1 回は」食べているか聞いた。その結果、動物性たんぱく質については 95.3% が「少なくとも 1 日 1 回は」食べており、生活困難度別に統計的な有意差は見られない。しかし、野菜、植物性たんぱく質、果物、乳製品においては、生活困難度別及び学校種類別に有意差がある。特に定時制・通信制に通う 16-17 歳の栄養の摂取頻度は、他の学校の種類に比べて低い。

図表 2-3-15 「1 日 1 回以上食べている」割合：全体、生活困難度別(16-17 歳)



図表 2-3-16 「1 日 1 回以上食べている」割合：学校種類別(16-17 歳)



4 住宅の状況

(1) 住宅の種類

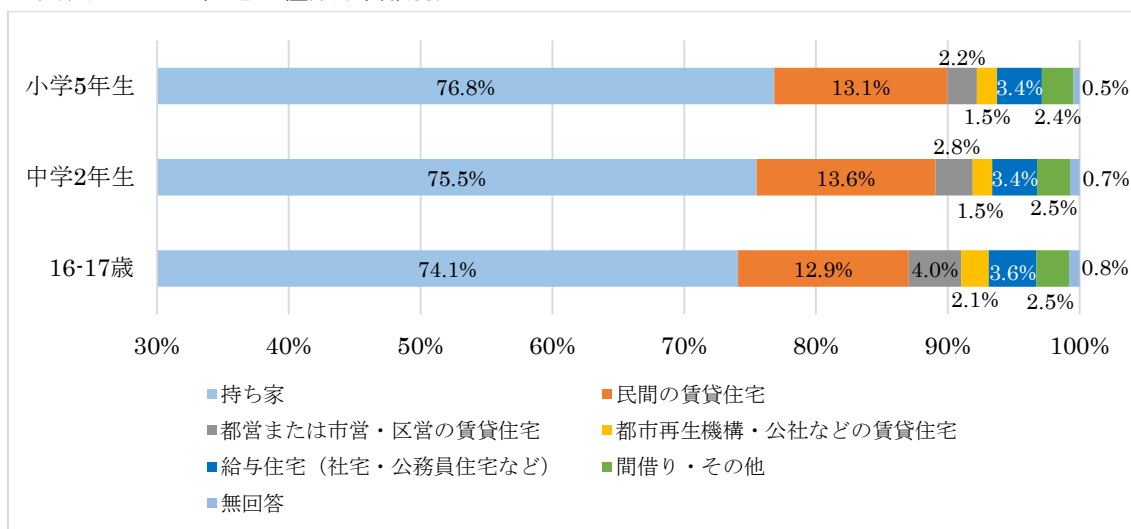
現在居住している住宅の種類について、子供の保護者に聞いた。分布は、どの年齢層においてもほぼ同様である。「持ち家」が約74～77%で最も多く、次に「民間の賃貸住宅」が約13～14%、「給与住宅（社宅・公務員住宅など）」が約3～4%、「都営または市営・区営の賃貸住宅」「間借り・その他」が約2～4%、「都市再生機構・公社などの賃貸住宅」が約2%であり、賃貸住宅に住むのは合わせて約2割であった。

住宅の種類は、世帯タイプ別、生活困難度別によって異なる傾向が見られた。16-17歳の世帯タイプ別で見ると、「持ち家」に住んでいるのは、ふたり親（三世代）世帯で94.6%であるのに対し、ひとり親（二世帯）世帯では50.6%である。ひとり親（三世代）世帯でも65.5%であり、ひとり親世帯はふたり親世帯に比べて「持ち家」に住む割合が低い。特に、ひとり親（二世帯）世帯では、約3割が「民間の賃貸住宅」に、約1割が「都営または市営・区営の賃貸住宅」に住んでおり、他の世帯タイプに比べて高い。

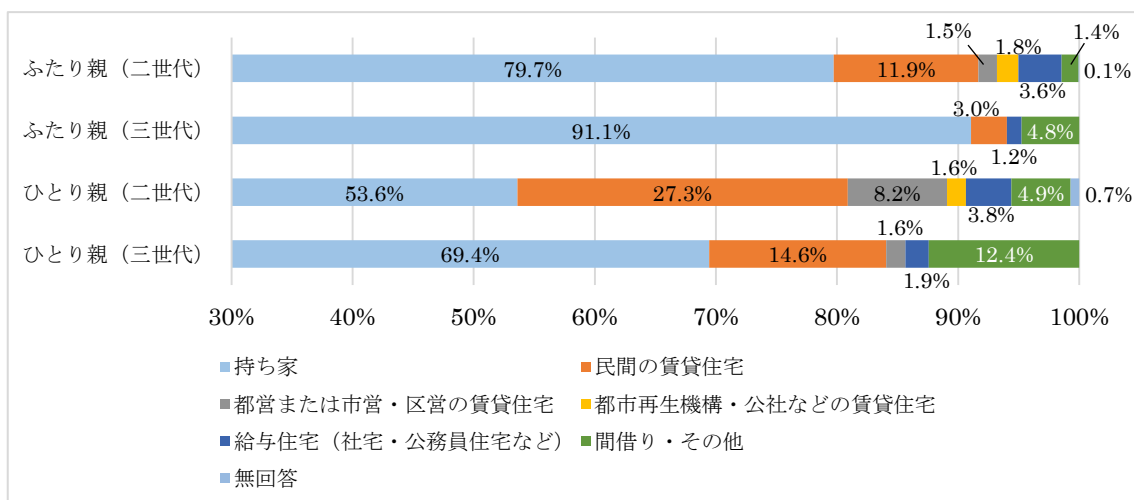
16-17歳の生活困難度別に見ると、一般層の79.1%が「持ち家」に住んでいるのに対し、困窮層は36.0%であり、生活困難度によって差がある。また、「給与住宅（社宅・公務員住宅など）」に住む世帯が周辺層では3.4%、一般層では4.4%であるのに対し、困窮層では0%である。

小学5年生、中学2年生の世帯タイプ別、生活困難度別においても同様の傾向である。

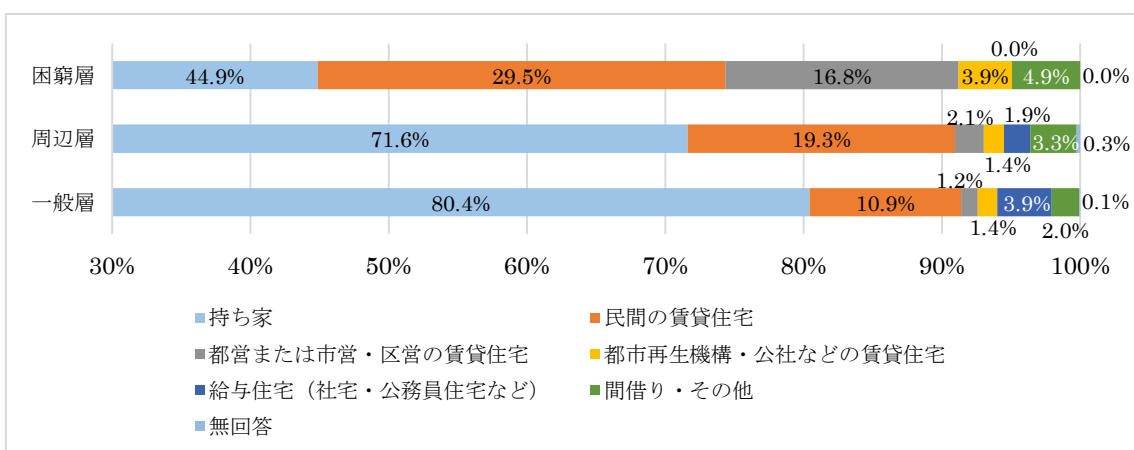
図表 2-4-1 住宅の種類(年齢別)



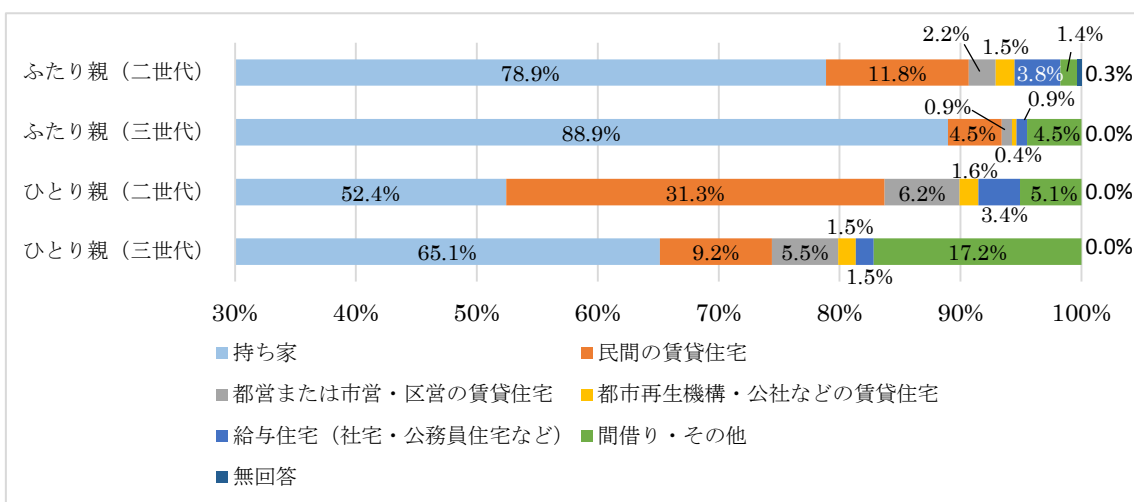
図表 2-4-2 住宅の種類(小学5年生):世帯タイプ別(***)



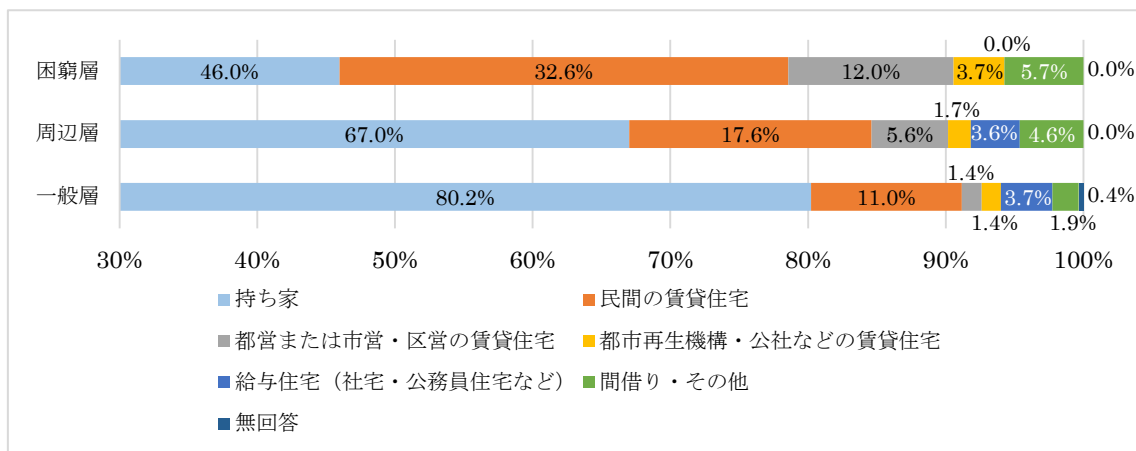
図表 2-4-3 住宅の種類(小学5年生):生活困難度別(***)



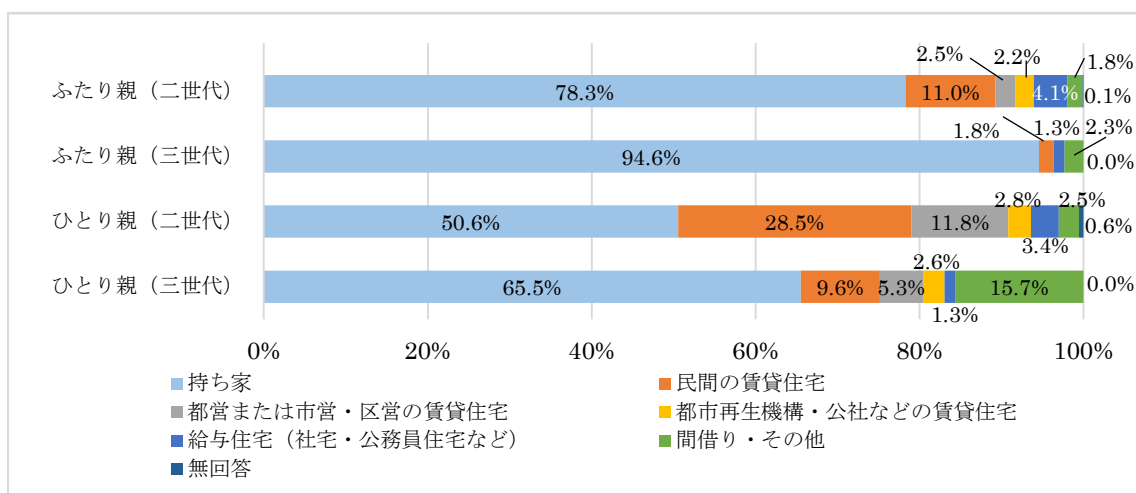
図表 2-4-4 住宅の種類(中学2年生):世帯タイプ別(***)



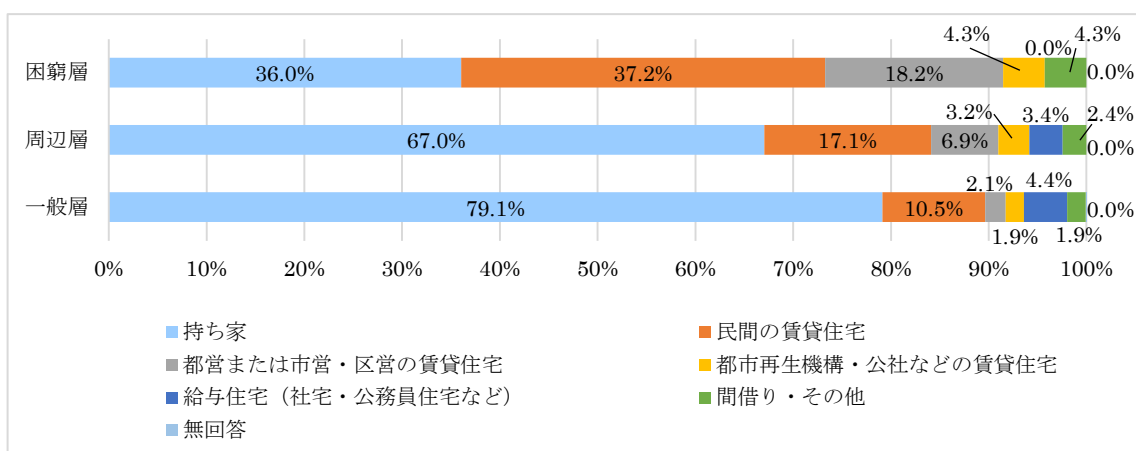
図表 2-4-5 住宅の種類(中学 2 年生):生活困難度別(***)



図表 2-4-6 住宅の種類(16-17 歳):世帯タイプ別(***)



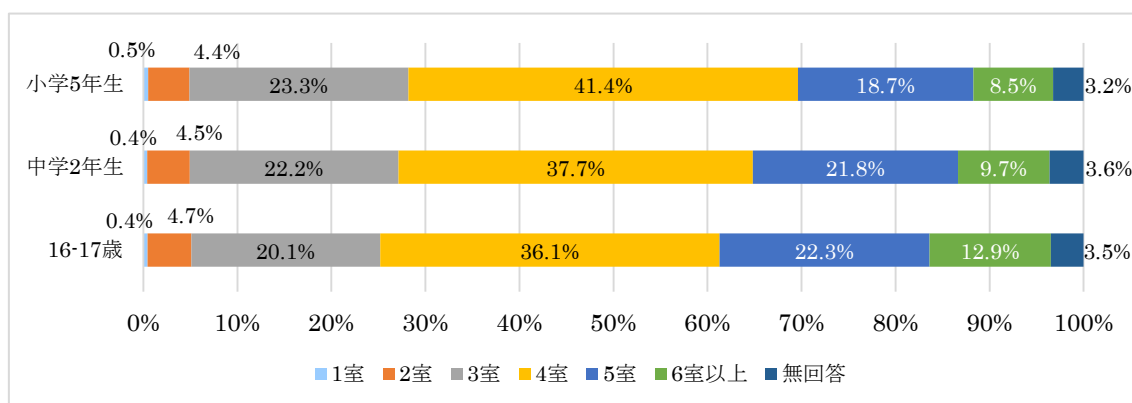
図表 2-4-7 住宅の種類(16-17 歳):生活困難度別(***)



(2) 住宅の広さ

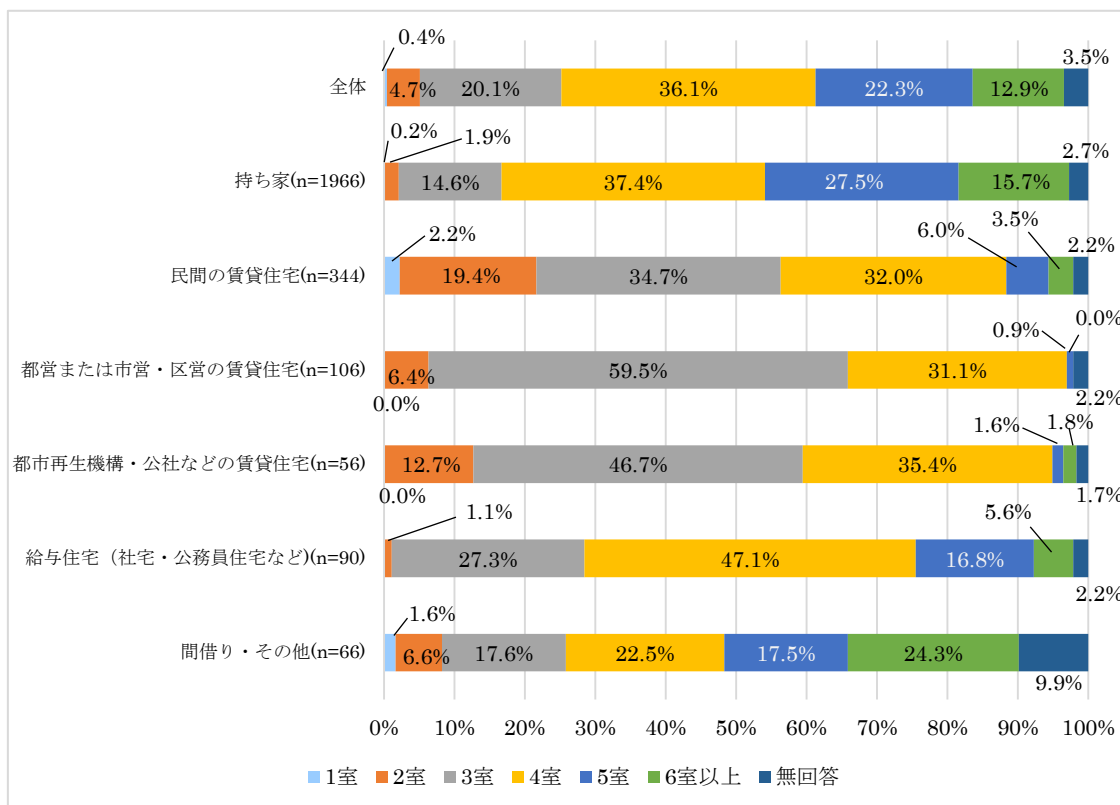
住宅の広さに関して、玄関やふろなどを含めない居住用の部屋数について、子供の保護者に聞いたところ、全ての年齢層で「4室」の割合が最も高かった。「4室」以下の割合は小学5年生で69.6%、中学2年生で64.8%、16-17歳で61.3%と、年齢が上がるごとに低くなっており、居室の数が「5室」、「6室以上」の割合が増える。このことから、子供の成長に合わせてより部屋数の多い住宅に住み替える世帯があることが推察される。

図表 2-4-8 居室の数(年齢層別)



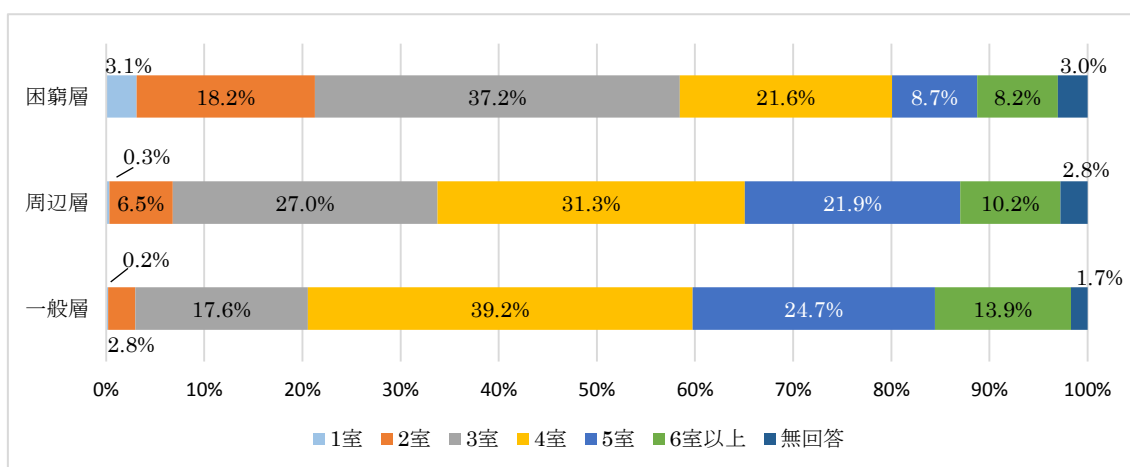
居室の数は住宅の種類によって傾向が異なる。ここでは16-17歳の状況に着目する。「3室」以下は、「持ち家」が16.7%、「給与住宅」が28.4%であるのに対し、「給与住宅」以外の賃貸住宅は、約56~66%である。さらに「2室」以下を見ると、「民間の賃貸住宅」が21.6%、「都市再生機構・公社などの賃貸住宅」が12.7%である。

図表 2-4-9 居室の数(16-17 歳):住宅の種類別(***)



居室の数は生活困難度別によって傾向が大きく異なり、16-17 歳においては、「3 室」以下は困窮層で 58.5%であるのに対し、一般層では 20.6%である。また、困窮層では「2 室」以下が 21.3%であり、一般層(3.0%)約 7 倍、周辺層(6.8%)の約 3 倍になる。

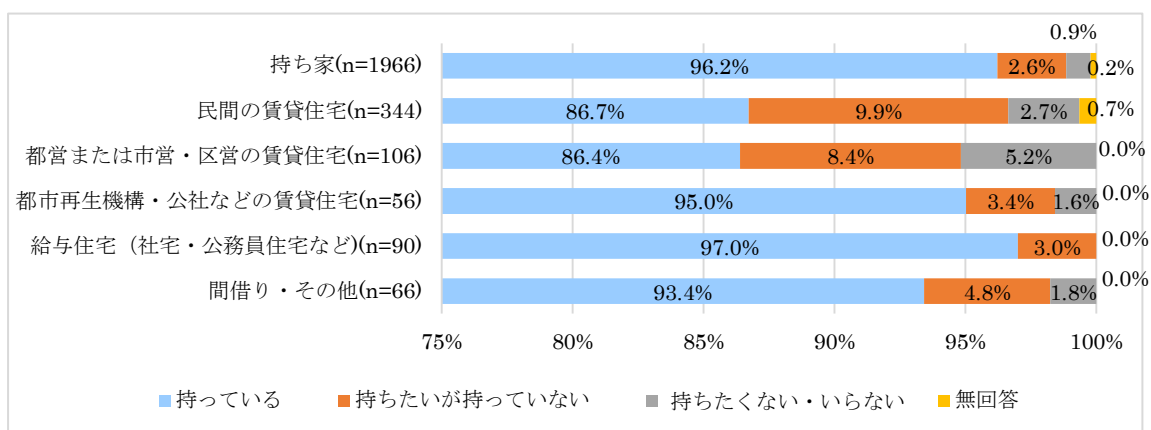
図表 2-4-10 居室の数(16-17 歳):生活困難度別(***)



(3) 勉強する場所

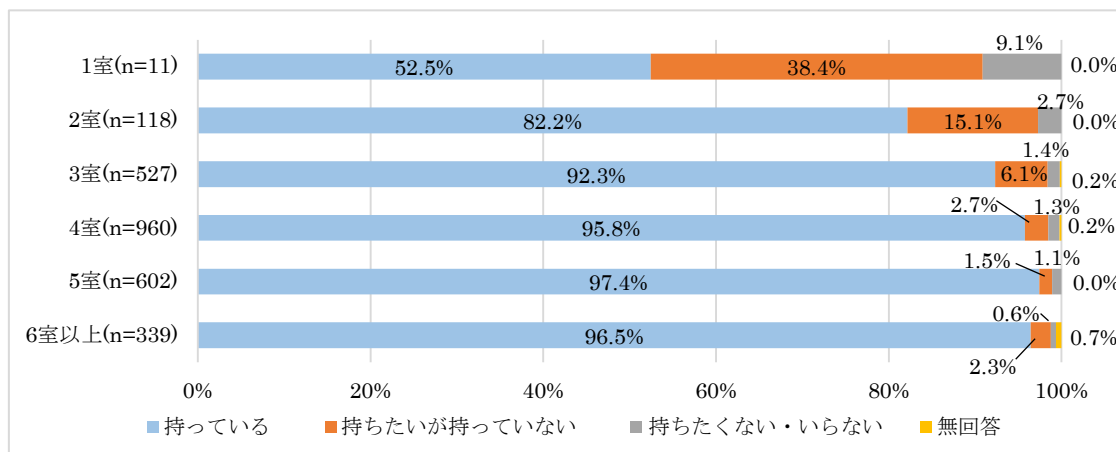
住宅が狭いことは、家の中で子供たちが遊んだり勉強したりする環境にも影響すると考えられる。とりわけ、16-17歳は親から離れて集中して勉強できる環境があることが望ましい。そこで、「家の中で勉強ができる場所」があるかどうかを16-17歳の子供に聞いた。住宅の種類別に見ると「民間の賃貸住宅」、「都営または市営・区営の賃貸住宅」に住む子供では、「ある（持っている）」が約86～87%、「欲しいがない（持ちたいが、持っていない）」が約8～10%であり、他の種類の住宅に住む16-17歳（「ある」約93～97%、「欲しいがない」約3～5%）に比べ、自宅での勉強場所を持っていない割合が高い。また、「都営または市営・区営住宅の賃貸住宅」の子供のうち5.2%は、勉強場所が「ない（持ちたくない・いらぬ）」と回答している。

図表 2-4-11 「家の中で勉強する場所」があるか(16-17歳):住宅の種類別(***)



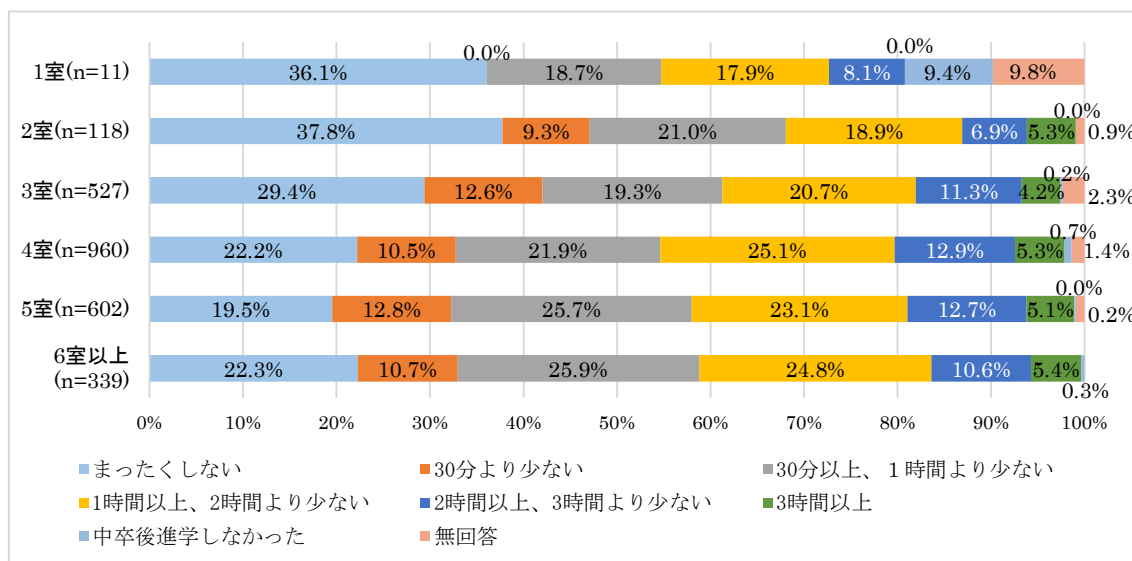
居室の数で「家の中で勉強ができる場所」の状況を見ると、16-17歳においては、居室が「4室」、「5室」、「6室以上」の場合、「持っている」が約96～97%であるが、「3室」では92.3%、「2室」では82.2%と低くなり、それに伴って「持ちたいが持っていない」の割合が高くなる。

図表 2-4-12 家の中で勉強する場所の欠如の状況(16-17歳):居室の数別(***)



居室の数で「ふだん（月～金曜日）学校の授業以外での1日あたりの学習時間」の状況を見ると、16-17歳においては、学校の授業以外で勉強を「まったくしない」のは、居室の数が「4室」、「5室」、「6室以上」の場合は約2割であるが、「3室」では29.4%、「2室」では37.8%と高くなる。30分以上から2時間より少ない時間勉強する16-17歳は、居室の数が「4室」、「5室」、「6室以上」では約5割だが、「2室」、「3室」では約4割である。

図表 2-4-13 学校の授業以外の学習時間(16-17歳):居室の数別(***)

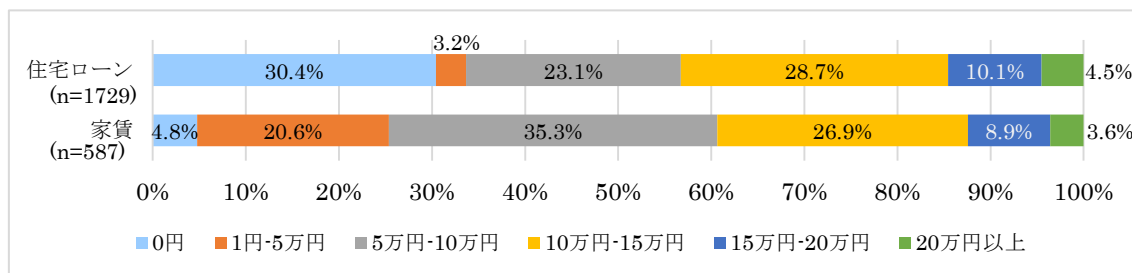


(4) 住宅費

①持ち家の住居費（住宅ローン）

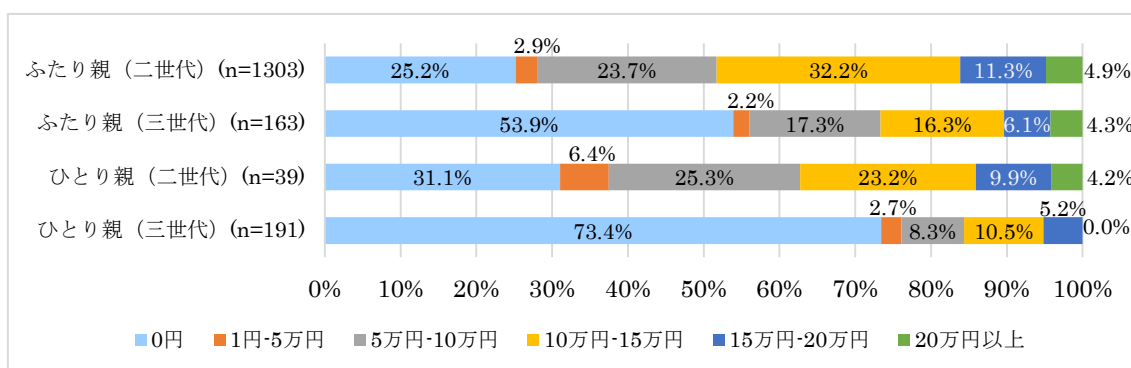
16-17歳のいる世帯のうち1か月あたりの住居費について見ると、1か月あたりの住居費（共益費・管理費を除く）は、「持ち家」の43.3%、「賃貸住宅」の39.43%が10万円以上（「10万円～15万円」、「15万円～20万円」、「20万円以上」）支出している。しかし、10万円未満（「1円～5万円」、「5万円～10万円」）では、「持ち家」と「賃貸住宅」とでは傾向が異なる。「持ち家」では、「0円」の世帯が30.4%、10万円未満のローン支払いをしている世帯が26.3%であるのに対し、「賃貸住宅」の場合は、10万円未満の家賃を支払っている世帯は55.9%である。

図表 2-4-14 1か月あたりの住居費(住宅ローン・家賃・間代)(16-17歳)



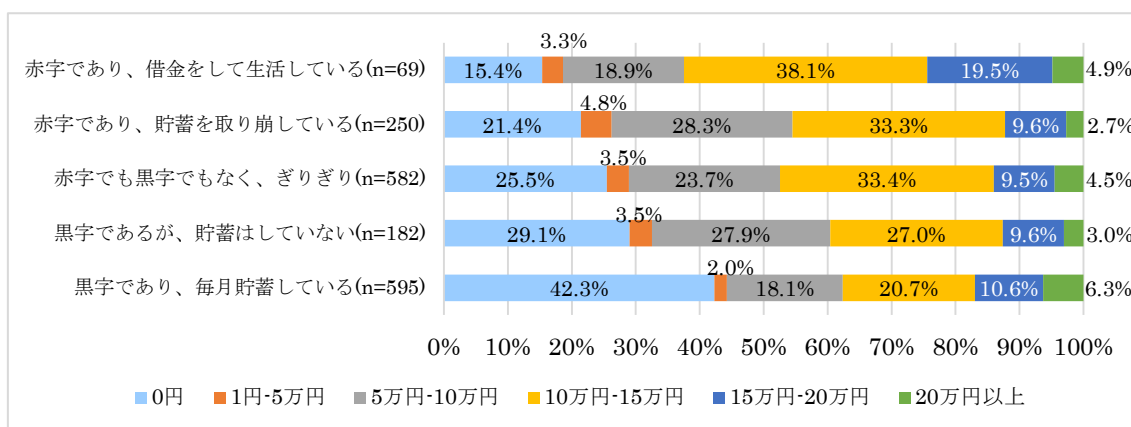
住宅ローン月額を世帯タイプ別にみると、ローン完済した住宅に住んでいる割合は、二世帯世帯より三世帯世帯の方が高い傾向にあった。住宅ローン返済額が「0円」の割合は、ふたり親（三世帯）世帯では53.9%、ひとり親（三世帯）世帯では73.4%であるのに対し、ふたり親（二世帯）世帯では25.2%、ひとり親（二世帯）世帯では31.1%であった。一方で、1か月あたり10万円以上の住宅ローンの支払いをしているのは、ふたり親（二世帯）世帯では48.4%、ひとり親（二世帯）世帯では37.3%である。

図表 2-4-15 持ち家の住居費(住宅ローン返済月額)(16-17歳):世帯タイプ別(***)



住宅ローンの支払いの有無は家計の状況に大きく影響しており、黒字の家計にゆとりのある世帯ほど、住居費「0円」、すなわちローンを完済していると思われる割合が高い。「持ち家」世帯の約43%が1か月あたり10万円以上の住宅ローン支払いをしているが、家計の収支が「赤字でも黒字でもなく、ぎりぎり」あるいは「赤字であり、貯金を取り崩している」世帯では約46~47%、「赤字であり、借金をして生活している」世帯では62.5%となり、毎月10万円以上のローン支払いが家計を圧迫していることが推測される。

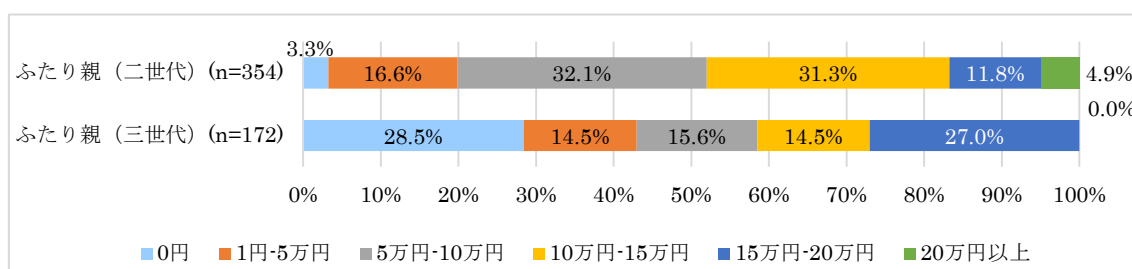
図表 2-4-16 持ち家の住居費(住宅ローン返済月額)(16-17歳):家計の状況別(***)



②賃貸住宅の住居費（家賃・間代）

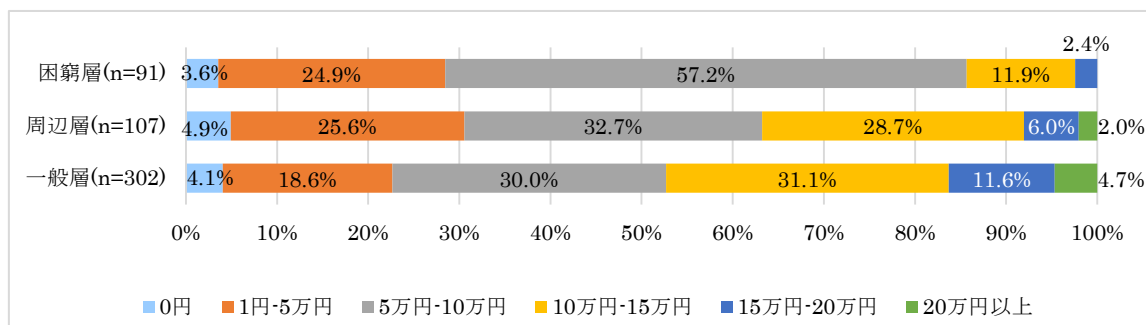
16-17歳のいる世帯の賃貸住宅の家賃について見ると、ふたり親（三世代）世帯では「0円」が3割近くを占め、祖父母世代が家賃負担している住宅に居住していることが推測される。また、ふたり親（三世代）世帯は世帯人数の多さを反映してか、「15万円～20万円」が27.0%と高い割合を占めている。

図表 2-4-17 賃貸住宅の住居費（家賃・間代月額）（16-17歳）
：ふたり親（世帯タイプ別）（***）



生活困難度別に家賃を見ると10万円未満の割合（「0円」を除く）は、生活困難度が高くなるほど高くなり、困窮層では82.1%を占める。一方で、毎月10万円以上の家賃を負担しているのは、困窮層の14.3%、周辺層の36.7%であり、これらの世帯においては家賃が家計を圧迫していることがうかがえる。

図表 2-4-18 賃貸住宅の住居費（家賃・間代月額）（16-17歳）：生活困難度別（***）



家計の状況別に見ると、家賃が10万円以上の割合は、家計収支が「赤字でも黒字でもなく、ぎりぎり」の世帯は31.3%であるが、「赤字であり、貯蓄を取り崩している」の世帯が36.8%、「赤字であり、借金をして生活している」世帯が38.8%あり、家賃支払いのために貯蓄を取り崩したり、借金をしなければならない状況の世帯があると推測される。

図表 2-4-19 賃貸住宅の住居費(家賃・間代月額)(16-17 歳):家計の状況別 (***)

